809-067ウ
1200500753125
9
67

話術覺書

小野賢一郎著

始

917
374

書覺術話

小野賢一郎著

809
0·67

話術覺書

小野賢一郎著

寶雲舍刊行

917
374

小序

突然、飛んでもない本を書きたくなつた。即ち只今の私は病氣のため齒を惡くし「口」は全然駄目といつてよい、それが話術といふ「口」の事を書かうといふのだから奇異におもはれても致し方がない。

然し、私は現在の日本を見て、多くの人が自分の意志を舌や筆で以て訴へやうと希望してゐることを知る。今は言論の時代である、思想戰に打勝つには確固たる信念と同時に「口」か「筆」が必要である。——だが、口を以て信念を發表するのに所謂雄辯會式に滔々と美辭麗句を並べたのでは決して大衆の耳を注意を引つける如き事は出來ない。私は多く講演といへば雄辯會式又は朗讀式になるのをひどくかなしむ、即ちそれは效果がないといつてもよいからである。

今夏酷暑を克服するにはドウするか、私の持病のためなら轉地がいゝかもしれない、然

話術覺書目次

小序……一
話術覺書……五
準備篇……七
一、先づ思想……八
二、草稿の用意……一四
三、草稿に囚るゝな……一五
四、服裝と食事……一八
放送とお話……二三
癖……

小序

し私は闘暑の法をとつて、寸暇さへあれば話術に就て書いてみることにした。時勢に感ずることがあつたからである。

私は昭和九年以來、日本放送協會に職を奉じてゐる、いろ〳〵講演についても希望なり所感もあるが夫れは遠慮して他日にゆづる。こゝで體驗といふのは、私が東京日日新聞社の社會部長や事業部長をしてゐた時代のことである。實に貧弱な體驗だが講演の回數に於ては相當だと思ふ。卽ち東は北海道、樺太に到り、西は福岡から長崎、鹿兒島に及んでゐる。中には自慢話らしいのもあるが決して自ら誇る爲の何物もない、只斯ういふ話もあつたといふ實情を書く上から自分が出たので、そこで自慢らしい話に落ちたのである。「實例篇」等には古く記錄して貰つたものや、雜誌新聞等の切拔きに依つた。今日としてみれば甘い話であるが、裝飾をせず生地そのまゝを出すがいゝと思つて其儘にした。

昭和十七年の孟夏、芝公園の僑居にて

著者

聲質・聲量……二五
體驗篇……二九
一、初めての講演……三一
二、白瀬中尉の南極探檢……三三
三、秩父の農村……三五
四、信州の農村から……三六
赤坂離宮の光榮……三九
御童謠のレコード……四三
實例篇……四五
一、雪の日の鳩の親子……四七
二、柿の木に手をかける……五三

談片篇……五九
一、二度なすること……六一
二、思はぬ御膳……六三
三、ニュース講演……六四
四、大隈侯と伊藤公……六六
五、唐宋の文明は日本に……六八
座談と講演……七一
結婚席上にて……七三
人生の大道……七七
飛行詩人を悼む……七八
和風翁の靈前にて……八三
句碑除幕式にて……八五

話術覺書

目次

藝といふこと……八九
新聞の今昔……九九
奥村五百子女史……一〇三
歸還軍人を迎へて……一一四
友人の一周忌に……一一七

辯舌を以て自分の意志を發表することはいろ〳〵の方法で行はれるが、話といへば普通の會話と思ひ所謂演說調子でやると雄辯だとか達辯だとか、いかにも一種の藝のやうに考へたがる。

こゝに私のいふ話術といふのは其のどちらにも屬しない會話も含み講演も包含されてゐる總べてのものと思つていたゞきたい。

雄辯といふにもいろ〳〵ある。自己の意志を表現するのに言語ばかりでなく身振り手ぶりで效果を擧げるのもある。又速記術を以てしても速記し兼る速度で終始する能辯家もある。(例へば故人になつた島田三郎氏の如き)會話でも壇上の講演は巧みでないが、案外談笑の間に妙味を發揮して人を醉はしむる話の巧者もある。講談師とか落語家の藝は全然別であるが大衆を相手にする巧者な人も案外卓上演說など派手でなく、又卓上式の巧みな人が壇上に立つと生彩に缺けるが如き事もあるのみか、其日の聽衆や自身の氣分如何に依つて出來、不出來のあることは否めない。

こゝに說く數項目の內容は私自身體驗した事を有のまゝ述べてみるのであつて、從來あつた雄辯學とか雄辯術とか、そんなむづかしいものは私には分らないし又勸めやうといふ氣もしない。今日は誰しも自己の信念なり意志を文筆か辯舌に於て述ぶる必要が多く、機會も亦多いので、幾分か參考になればよいと思ふだけの事である。

明治以降福澤翁は演舌といふ文字を使ひ始めて門下や友人の間に演說を奬勵した、が私は時代がちがふから不幸にして翁の演舌なるものを聞かない。私の知つてゐるのは議政壇上、その政見發表の他であつた。

準備篇

お話をする、講演といひ講話といひ、又、童話と區別しても皆共通的な用意が必要だと思ふ。

一、先づ思想

何といつても話者から放散する一種の香氣、風格、さういふものが第一に聽者に影響する。それは言はでもの事であるが思想——志操——をどの程度に話者はもつてゐるか、持つてゐるだけぢやない、身につけてゐるか、といふ事が一番大切である。肩書が物をいふ場合もあらう、位階が物をいふ場合も社會的地位が物をいふ場合もあらう。然し、どんな人でも其人の魂以外のものが物をいふのでは一種の臺詞(せりふ)にしか過ぎない。この思想といふものは俄かづくりで身につけられるものではない。日頃の勉強なり考へ方なりが身につけ

てくれる。最も簡明で雄辯で意味の明瞭なのは、出陣に臨んで上官から訓示があつた、其なかで

「彈丸の一發は自分のために殘しておけ」

といふ一語であつた、と誰もいふ。卽ち「生還を期せず」といふ心構へを軍隊らしく率直に言つたのである。この一語はさう容易に出るものではない。深い根ざしがあつて初めて生れたものだと思ふ。

二、草稿の用意

聽者に納得させるには話す技巧も必要だらうが、話す內容をよく檢討しておく必要がある。話さうとする目的——卽ち重點はどこにおくか、重點の表現に言葉なり引例が具備し

てゐるかドウか、といふことを先づ檢討し、話す全體についてもモウ一度考へてみる。卽ち全體として趣意が一貫してゐるかドウか、又相當の動きがあるか、卽ち息をぬく場所とか主意を高調させる點とか、難解の言葉がありはしないか、起承轉結と漢詩にもいふが初めは話頭を起し、これを承ける意味の話があり疾風迅雷の如く話題一轉して主意の眼目に入り之を强調して聽者の心を掴み、而して結論に於て全體の締括りをつけて主意をいやが上にも徹底させる——さういふ準備は原稿を作る時に考へておかねばならぬ。

原稿を作ることは誰しも面倒がつて、なか〳〵出來ないものと見える。現に私自身がやれなかつたが、これはドウしても必要だと感じて忙しい時は扇とか手近なものに要領をかきつけたことがあるが、原稿は一度は書いてみるべきである。原稿を持つて話さないでも話すうちに原稿の字があたまの中に浮んでくるし、要項といつたやうなものを思ひ出して脫線はしない。これは體驗の上から是非必要であるといふ事を申上げおく。

例にとるやうだが德富蘇峰翁の前座を承つて新潟縣下の隅から隅へ、佐渡ケ島の大體を

巡講したことがある。初めの豫定は廿五ケ所位だつたと思ふ。私は何の準備もなくオイソレと飛出したが高田市で翁の一行と出會ふと翌朝驚いた、といふのは翁は午前五時頃から起床して「日本國民史」の來年の分の稿をつゞけ、夕刊の論評も書いてゐられる、といふのである。老翁の此の精力にも驚いたが講演會の席上、翁は懷中から卷紙樣の講演草稿を取出して始められる。お得意の國史だが高田なら上杉謙信とか春日山城とか、藩の偉人物とかに亘り興味深く、且つ高調に達すると、日本精神に力點をおいて、堂々と論じまくられる。

秘書からきくと東京出發前廿五ケ所分の講演草稿を書いてゐられる、重點の日本精神昂揚のところは毎日やられるからよろしいが、他は廿五回とも皆ちがつてゐるといふのである。これにはまゐつた、いかに前座とは申せ片々たる話ばかりぢや相すまない、今更草稿も出來ない、然らばやり方を變へて新聞記者は夫れらしく何か町や村で見たものを取上げて話題にしようと考へ、それからは毎日宿をカラにして專ら町や村を歩くことを考へた。

而して毎日何かを取あげると聽衆に先づ新鮮感を與へ得ると信じた。

長岡市についてハタと困つた。河井繼之助その他の偉人豪傑について蘇峰翁は屹度話されるにちがひない。何か飛んでもなく變つた話題はないかと考へたがない、そこで今は故人になつたが神田の古本屋一誠堂主人が歸省したといふのでひよつこり現はれた。この人を案内に町を歩いてゐると骨董屋があつたので一寸立寄つた。そこで見たものはナンと驚くべくいゝもので、又驚くべく安いものであつた。一つは古伊萬里の長皿で一つは明時代か清初期の染付皿である。この二枚を買ふことにしたが金を持たない、宿に屆けて貰ふことにして其夜の私の演題は「親鴉子鴉」といふのであつた、といふのは染付皿の圖案が奇拔で、支那の童子が子鴉の脚に紐を結はへて遊ばせてゐる。童子は嬉々としてゐる。然るに親鴉は此の樣子が不安なのか木にとまり空に舞ふて心配さうに啼いてゐる圖案、私はこの鳥にして親子の情あり……といふ處から畏くも皇后陛下がまだ久邇宮家におはしました頃、御庭にあそぶ小雀を御覽になつて

小雀よ、なとさ驚き飛びたつぞ
とる人はなき庭としらずや

といふ御歌を遊ばした、御仁慈の御心は禽獸にも及んでゐる、といふ事から物のあはれといふ所感を述べた、この聯想風な話の緒は古染付の圖案にあつたわけだ。蘇峰翁も聞いてゐられて「小野君のは當意卽妙だから新聞記者らしくておもしろい」と云はれたが、實は私にも到らぬながら少々の苦心はあつた。要するに私なんかは困つた揚句の思ひつきに過ぎなかつたが、蘇峰翁の如きですら、充分の用意がある、又放送で名講演といはれる奥村情報局次長も草稿態度に苦心があり、海軍の平出大佐も放送室に入るまで草稿を練られる例もある。放送だけ聞いてスラ〳〵といつてうまいと褒めるだけでは相すまない。

もう一つの例は今南方で活動されてゐる永田秀次郎氏の事である、私は氏とは後藤新平伯在世時代、後藤伯と氏と共に水戸市へ講演にいつたことがある、高等學校へも序にいつたと思ふ。後藤伯は車中で多くの新聞記者相手に談論風發、永田氏は車の隅の方に默々と

されてゐる。何か手持無沙汰らしい感じがしたので俳句の話など相手になつてゐたがフト私が氣がついた——といふのは氏の手にノートがあつて何か書いてゐられるらしく見てとれたからである。ハヽア講演のメモだな、と思つたので私は話を止した。

果して放送などで大人氣をあつめる永田氏は草稿を作る人であつた。氏の著書の中に放送原稿が相當はいつてゐる筈である。氏は草稿を放送向に書き、話題を轉ずる時とか、息をぬくところとか一々印をつけて幾度も練習した上でないとマイクロホンの前に立たれないやうだ。冗談めいて人を笑はせる、といふ事は藝人のやるのとちがつて話者には必要なことである。殊に放送など人の影は見えないで聲のみであるのだから話者を身近に感ぜしむるといふ事は放送内容に聽者を惹きつける上に於て成功する第一歩であつて、永田氏の言葉づかひはナマリがありながらも、ナマリが少しも氣にならぬ妙諦に達するといふ所以のものは、氏の用語、運び方が極めて聽者に身近のものである證據だ、そこに氏の苦心があつて笑はせる所謂息ぬきのところ、强く押すところ、すべて草稿の苦心に依る結果だと

思ふ。

三、草稿に囚るゝな

草稿は前にいつたやうに必要である。併し草稿に囚はれては折角の講話が死んで了ふ。草稿を朗讀するだけなら何も忙しい中を本人が出向かれないでいゝわけだ。

また講義めいたものは別だが餘りに教壇的だと聽衆の反感を招き易く、一語々々にはなるだらうが全體としての伸縮性を缺き話に生彩がなくなる。私は日本放送協會に入つてマイクの前に立つた事は數へるほどしかない、協會にはいらない以前に二三度やつた位で職員になつてから一度もないと思ふ。

草稿は必要だが草稿朗讀ぢや困る。これは放送で最もよく分ると思ふ。草稿はあつても

一種の覺書きと考へて活殺自在であるべきだ、さういふ人の話が最も大衆に親しまれ又よく聽かれるらしい。

原稿をマイクの前でめくり初めると案外大きな音がする、紙の音といつてもバカにならぬ、初期の擬音では、紙をクチャ〳〵にして機關銃の擬音を出した位だから案外大きな音がする。草稿は造るべし、然し草稿に囚はれてはならぬ、といふことが大切だと思ふ。

講堂などでも講義以外に草稿を讀むのぢや何の感銘も呼ばない、むしろうまい聲の透る人に代讀して貰ふ方がいゝかもしれない。

四、服裝と食事

服裝の事をよく氣にする人があるが、服裝は人の思想を現はす、特別なわざとらしさの

ないことが大切だ。其人らしいといふ事が一番で少しでもイヤミがあつては問題にならない。其聲を聞かないうちに先づ反感を買ふばかりである。

これは講演とはちがふが、其職業に依つて服裝を正裝にしておかないと良心的でないといふ人がある、軍人の軍服は當然であるが死んだ竹本綾之助は義太夫を語る場合は社衿をつけてゐた。また清元延壽太夫の如きは紋付袴は誰もやる事であるが放送する前など先づ宮城に向つて拜禮し又マイクを通じて一般聽衆に禮をするつもりかマイクに向つて禮をする。今では國民儀禮など會合では必らずやるのだが之れが十年も昔のことだから「名人といはれる人はちがつてゐる」と感心したものだ。

服裝の點は常識で話者の人柄らしく、又その席も考へなければならぬが食事はよく話題に出る、身體が健康でなければならぬのは當然であるがイザ講演となつた場合、食事を攝つておいた方がいゝといふ人もあるし空腹の方がいゝといふ人もある。中には酒を一杯やつた方がいゝといふ人も出る。然し私の體驗では酒をやるなど以ての外で婚禮の席上で二

分か三分の話ならしらず迚も三十分とつゞくものでない、又滿腹してはいけない、私なんか胃の方に血液が下つて了つて、頭は空つぽの感じがする。そこで空腹といふ事がいはれる。私は空腹の時の方が調子がよろしい、然し空腹だと感じ出したらモウいけない。結局一寸した生卵の一つ位のものを飲んでおくか食事をした後、相當の時間が經つての後にするか、講演の長短により場所によりちがふのだが、西洋料理が腹一ぱいになつた、デザートコースに入つて立上つて長い話をするなど愚の骨頂だし、食後めいた話以外力のこもつた話は出來ないと思ふ。

放送とお話

放送については言はない事にした。そのことは一寸書いておいたが全然觸れないといふこともおかしいので放送協會が放送を依頼する場合「放送の栞」といふ印刷物を參考に放送者へ差上げてゐる。其うちの要點を摘錄してみると

○

一、演　題……聽取の上に極めて大切な手がかりで御座いますから、係員と御相談の上なるべく效果的におつけ下さい。

二、原　稿……イ、放送原稿の分量はお話口調その儘にお書きになつて、一分間二百

字といふところが適當であります。

ロ、必ずしも文章に於ける句讀點と一致させる必要はありませんが、御自分の口調にあはせて區切りをおつけ置き下さい。

ハ、少な目に原稿をお作り置きになつて、別に時間が餘れば話さうといふ豫備原稿を一二枚御用意になると時間の調節に御便利です。

三、內　容……これ丈は是非聽かせたいと思はれる點に集中して頂き、前置き的なお話はなるべく避けられて單的に要點に入られた方が、より效果的でございます。自己紹介などもアナウンスと重複しますから不要です。

四、用　語……聽取者は一般大衆であり、その上耳から聽くだけでありますから、言葉は出來るだけ平易に、特殊な言葉、難かしい熟語、同音の言葉を避け言ひ現はし方もなるべく簡單にし煩雜な論議はお避け願つた方が效果的であります。已むを得ず難かしい言葉をお用ひの際は必ず直ぐ後

で文字又は意味をのみこめる様に説明をつけて頂き度いと存じます。

五、時　間……前後の御紹介アナウンスの時間を御考慮願つて、二十分間ならば十八分間位の正味とお含み願ひます。萬一時間が延びますと、折角のお話の途中で切らねばならぬ様な申譯のないことになります。

六、練　習……御自宅で時間を計りながら御放送どほりに一、二度やつてみて頂き、その折區切りのよい所に時刻をお書き入れ願ふ外、出來ますならば當日は早目においで下さいまして、マイクロフオン前で練習をなさつて頂き度う御座います。

七、禁止事項……左の事項は法規によつて禁ぜられてゐますから、御注意願ひたう存じます。

（イ）政治、外交、軍事等國家の機密に亘る事項。

（ロ）政治を批議する事。

（ハ）廣告、並に個人或は團體の攻擊に亘る一切の事項。

（ニ）其他係員より特に御注意申上げた事項。

○

一、準　備……原稿はお綴ぢにならぬ方が便利です。綴ぢた原稿を繰りますと、放送では思ひがけない大きな音が致します。

二、來　局……遲くとも放送開始二十分位前までに御來局願ひ度う存じます。

三、姿　勢……マイクロフオンに向つて樂な姿勢でお話し下さい。但し御身體を前後左右に動かしたり俯向いたり、横向いたりなさると御聲が充分マイクに這入らぬ場合がありますから御注意願ひます。

四、語　調……演說や朗讀の口調にならぬ様ゆつくりした親しみのある調子で、聲も餘り大きくなく座談風にお話下さることが聽取者に感銘を與へる様で御座います。

然し放送では、身振りを以てお話の要點を徹底させることが出來ませんから適當な抑揚は勿論必要かと存じます。

五、紹　介……放送はアナウンサーの合圖によつてお始め下さい。放送がすみますと結びのアナウンスを致しますから、それが終るまでは言葉をお發しにならぬ様お願ひ致します。

六、その他御得心の行かない點は充分係員とお打合せ願ひ度う存じます。係員は皆様の御放送の效果をよりよく致しますために、色々のことを申上げると存じますが御諒恕賜り度う存じます。

癖

よく聞かれることは腹の帶はドウするか、洋服なら紐帶（バンド）は力が入るまい、といふことである。

これも程よく締めておくのが一番いゝことで、意氣込んだからとてギウ〳〵締めては却つて講演の邪魔をする。私は左の手で紐帶を輕く掴みながら話す癖があるが、此の癖といふはなか〳〵癒らないもので左か右の肩が上つたり短衣（チョッキ）に指を突込んだり、演壇の上をぐる〳〵歩いたり様々な癖がある。私は自分の習癖をよく知つてゐる、前にいつた如く左の親指と人指指で紐帶を挾みながら話すことである。話が調子に乘ると右の手を突出して親

指を立てる、餘りいゝ癖ではないが、友人にきいてみると別に嫌味でもないからいゝぢやないか、といふので其儘にしてゐる。何しろ私の壯年時は廿數貫の體量があつたから三十分以上も話すと兩脚が體重と力を入れる爲め疲れてくる、それで時々演壇の卓子(テーブル)に近づいたり又は退いたりすることがある。

死んだ藏原惟郭氏は政治演說のうまい人だつたが、ドウかすると赤いチョツキを着たり、手で一寸妙に思はれる表現をするので赤チョツキとか猫の手とか野次られた。あれほど巧みな人だから人に聽かせるに充分なのだが服裝の異色とか手つきとかゞ妙な綽名をつけられる原因になる。又餘りに端麗らしく裝ふとキザに見えるのか其人の眞價以下に渾名されて了ふ。心すべきことである。

聲質・聲量

聲はうつくしい必要がある。折角いゝ話をするのに聲質が惡いために割引されて了ふことがある。ザラ〳〵した聲とか、若いのに嗄(か)れた聲だとか、金屬的な疳高い聲だとか、決していゝ聲とは申せない。

聲量も亦大切である。遠くへ屆かない聲量と思つてゐるのに、案外隅々まで聞える人もあるし、胴間聲で戸がピリ〳〵する位だからキツト隅々へ屆いてゐると思ふのに、途中でポツリと遮斷したやうに打切れてゐる性(たち)の人もある。

幾らかでも他人に話を聞かせやうとするには相當の鍛練をしなければならない。藝人な

ど寒稽古といつて寒風の朝物干臺に上つて練習する。血反吐を吐くくらゐの猛練習をしないと「咽喉が吹き切れない」と稱して鍛練未熟としてゐる。何も藝人の眞似をしなくともよいが講演する人とても相當の苦勞をしなければならない。

また私の話になるが私は少しも鍛練などしなかつたが、前に言つたやうに講演旅行をして度重なるのが自然習練したことになつたのであらう。

講演會では始めのうちは聽衆がざわめく、話術研究會で德川夢聲君は威壓して鎭めたことを話してゐたが私は別に方法も考へなかつた。聽衆がざわめく間はぢいつと壇上から見詰めてゐるだけである。鎭らない以上決して口を利かない。見詰められてゐる聽衆はざわつく事依然たるものだが、全聽衆が話者が何故に口を開かないかを察して自然視線が其一點に集まつてくる。四五人の野次馬は次第に氣まりが惡くなるのか鎭まつてくる。

サテ口を切り出すと私は低い聲で話のマクラを話し出す。聽衆が此の低聲のマクラに耳を傾け出したらモウ話者の勝である。勵聲一番話の內容と共に飛躍してくると聽衆は益々

鎭まつてきいてくる。

衆議院議長をしてゐた田子一民氏と、千葉縣の八日市場だつたかの青年團の講演にいつた。田子氏の樣子をみると初めから終りまで一本調子でまくし立てた。これも一つの方法だな、と其時思つた。私の話は一時間半位ですませたかと思ふ。

聲質については少しも自信はないが故松田源治氏（文相）から褒められたことがある。それは原敬氏が首相であつた頃、別項に謹記した　今上陛下が攝政宮殿下として御渡歐のニュース映畫第一報が到着した頃、四方八方で引張り凧だつたが首相官邸でも映してくれといふことになつた。今の官邸とちがふ官邸だつたが井上、松方、大隈などの元老も列席し各大臣、あとは各省次官以上といふことであつた。誰かゞ「これだけの人物が官邸に集るといふ事は天下の一大事だよ」といつた位だ。此日は特別で一度も官邸內部を撮影したことのないのに、わざ〳〵原首相、各元老等が撮影した。拜觀する人に、皆說明書を渡したが「誰か代表者から話にしてもらつた方がいゝ」と首相が言ひ出した。書記官がさうい

ふので「然らば私がやりませう。御旅程は大抵私が承知してゐますから」と私が大體の御旅程風物と共に映畫面の御動靜についてお話をした。

すんでから原首相は私の側へ來て「御苦勞でした。よく拜觀出來て有難い、元老も私たちも海外へ御旅行になつて定めし堂々と遊されてゐるとは信ずるが眼前に拜するやうに明瞭に拜寫されてゐてうれしかつた」とにこ〳〵し乍ら禮を言つた。其側で松田源治氏が「君の聲はいゝね、聲の色と量とが丁度うまく溶け合つてゐる。君なんか將來議政壇上で雄辯を揮ふのだね」とむやみに褒めあげた。議會などへ席をもたうなど全然考へてゐない私だけにオヤ？　と思つた。

體驗篇

一、初めての講演

古い話だが、初めて演壇らしい演壇に立つたのは東京府下の田無町であつた。何の動機だつたか忘れたが明治四十三年頃だと思ふ。たしか軌道の車庫の中であつたが新聞記者といふのが興味をもたれたのか、同町に私の友人がゐたので其の宣傳がきいたのか一ぱいの聽衆だつた。

初めての事だし腹案の十分の一も口を利いたかドウか忘れた、たゞ其時に一つの大切な事を發見した。それは自分の講演中、よく聞いてゐる人とひやかし半分の人とを見つけ出すことである。私は此時以來、一つの目標をおくことにきめた。それは聽衆のうちで少年か婦人か老人か、兎に角一番當日の聽衆の中で普遍的な共通性をもつた人を見つけ出す、

而して其人が熱心に聽かうとするうちはいゝが欠伸をするとか飽きた態度をみせるとか、見當がついたならば話す調子を變へるか話題を一轉するか、然るべき方法をとるといふことである。言ひ換へれば一種の檢溫器みたいな標準を見つけておくといふ事だ。一人でもよく又二人でもよい、標準の聽衆を見乍ら話を進めてゆくといふやり方である。私は隨分舌の行脚をしたが此の方法は當日の會場の空氣をみて直ぐ用心した。

二、白瀨中尉の南極探檢——秋田縣下の講演旅行——

秋田縣が東北地方中ドウも新聞の紙數が他に比べて思はしくない、映畫班も押し出すが夫れだけではいけない。新聞社が主催する以上、たゞ御機嫌を取結ぶといふだけではいけない。誰か講演をやつて新聞に社會記事もあるが論文もある如く一席づゝ加へやうといふ

事になつた。ところが聽衆といふより觀衆だ、みなニュース映畫初期の頃だから觀たい方が一ぱいで講演など實に迷惑なのだ。來場者は劇場だとすると花道から舞臺裏まで滿員、辨當持參で山坂越へて五里も先から來てゐる。滿員だから窓にぶら下つてみてゐるといふ狀態、その中で講演といふのだから當然騷ぐ、野次がはいる。社内の記者連も誰も彼も此の苦辛を舐めてゐる。中には口も利かせない位大向ふが騷いで五分と口を利かないで退壇した人もある。又は野次の手に妙な拍手で叩き伏せられた人もあつた。併し東日も大毎も此の修業のため一時相當に話をする記者が多かつた事は事實である。

そこで私は秋田縣へ行くことになつた。確か明治四十三年だつたかと思ふ。十和田湖の麓から山形縣境まで二ケ月位毎日毎夜講演をした何も映畫の間に挾まるばかりではない。畫間は小學校とか青年團とかの依願や文學に趣味をもつ人の會もあつた。私は此の行で一つの山を持つた——といふのは南極探險をやつた白瀨中尉は秋田縣の出身である。此の探險隊の一行の消息がシドニーから打電してきた。これをきつかけに私は通信戰を語り新聞

を語らうといふ手だつた。私の演題は「赤い紙」といふのであつた。卽ち外國電報の用紙は赤い紙だからである。赤い紙がドウいふ働きをするかを話すのだつた。聽衆が騷ぎ出すと私は赤い紙を右手に持つて「この一枚の紙に何千圓といふ金がかゝつてゐる。それはドウいふわけか、秋田縣の人だつたら知つてゐる筈だ」と土地に結びつけた。或る町で一度この手を使ふと場內が靜肅になつた。この味を覺えて私は幾度もやつた。その頃の青年は今では代議士となり縣會や市町村の中堅となつてゐる。よく「赤い紙の話を覺えてゐますよ」と聞かされる處を見ると案外印象が深かつたかもしれない。

これは私のやつた幼稚な手段に過ぎないが、赤紙を右手に持つてゐるといふ處に焦點が合つて何だらう？　と一種の興味と疑惑をもつたにちがひない。

この行で縣下を一巡すると、紙數は十倍になつたことがあり中には廿倍にもなつた町があつた。

三、秩父の農村——敬老會の六時間講演——

死んだ塚原澁柿園翁と一しよに之れも新聞のため秩父に入つた。塚原翁は歷史小說家として有名だつたが案外地質學にも興味をもつてゐて鎚を腰に挿し岩角などカチ〳〵叩いては歩いた。秩父の山峽を北にいつたり南へいつたり、農村から農村へと歩いた。

秩父町の一里餘り手前に原庭といふ農村がある。この村から講演がすんで一、二ケ月して又私に來てくれろ、といふ希望があつた。

敬老會といふので學校には校庭に莚を敷いて老人がうんと來てゐるし、若い人たちは接待にはづんでゐた。私は午後一時からやることになつて演壇に立つて明治以降の日本史的な事實を平易に述べはじめ午後三時になつてヤツト明治天皇樣御重態の大事に及び二重橋

前に赤子が雲集して御平癒を御祈りする處になつた、丁度約束の時間になると聽衆中のお爺さんが「時間は遠慮せずに、つゞけておくんなさい」と叫んだ。皆拍手して賛成してくれた。それから御大葬となり、乃木大將夫妻殉死に及び私の見聞を話し出すと日は暮れてきた。秋の日が――さうするうちに提灯が點され、とう〳〵七時になつた。敬老會で老人が多いので早く切り上げたいと思つたが聽衆の方が餘り熱心なのでとう〳〵七時半になつた。正に六時間半の話しつゞけである。私も隨分回數はやつたが長講もこんな長い時間は初めてだつた。

要するに何でもない、要は平易で分り易い言葉と事實で終始したといふだけの事である。

四、信州の農村から――雪の夜の大晦日――

長野縣は講演はやかましい處とされてゐる。長野縣で思ふだけの事がいへれば一人前だ

といはれてゐた。

大正何年だつたか知らないが冬の雪の日、天龍川を左岸に右岸に講演旅行した。案外の處から臨時に申込みがあるので人力車の上で講演の内容を考へ乍ら忙しい思ひをした。

大島とかいふ農村があつた。小學校の講堂で一回講演はすませた。夕飯がまだゝつたので支度をしてあるを幸ひ村の有志の人たちと食事をした。鹽鰯が飯の中に炊き込んであるのだつた。この村の會は臨時だし且つ大晦日だ。私は東京へ歸つて元日を迎へたいと思つてゐたが村の人ははなさない。一回すんだらモウ一回やつてくれ、といふのである。大晦日で月はあり山深く天地は雪で清淨、私も感激して又一時間ばかり話すと青年團長の校長が今から座談會をやるから出席してくれ、といふのである。講堂に荒莚を敷いて村の青年男女がつゝましく並んでゐる。何か一文菓子のやうなものを食べて溫かいものといつては番茶のみである。青年は盛んに談じ又は質問を發した。私も分る事は答へた、とう〳〵夜の十二時を過ぎた。サア元日だ！　といふわけで一同萬歳を叫び各自家路へ深い雪の中を

歸るのだ、私とて乘物どころぢやない、雪の中を拔き足、さし足してヤツト田舍らしい宿まで辿りついた。

元日になつて東京へ歸る汽車に乘つた。こんな經驗もはじめてだつた。

赤坂離宮の光榮

今上陛下——攝政宮殿下にましました頃、歐洲を御巡遊になつた。そのニュースは勿論だが御旅中の堂々たる御態度は、外國人も驚嘆したが日本國民を感激させた。

第一報のニュース映畫が屆いたのを燒付もそこ〳〵に沼津御用邸に私は急行し、天覽、臺覽の光榮に浴した。それから幾日かして在京の宮殿下廿餘方が赤坂離宮で臺覽遊ばすといふ事になつた。

その日は、大廣間の中央に衝立樣の幕を張り各宮殿下がズラリと御椅子に、後の方へは女官達が緋の袴を穿いて拜觀してゐた。御英姿が映ると女官たちは皆拜禮した。それが度

々なので宮内官から「お許しを願つて其儘、たゞ心の中で敬禮して」と言葉添があつた。

この日も私に說明し且つ私の旅行した見聞もあつたら交ぜてよろしい、といふ事であつた。私は此日潔齊して臨んだが各宮殿下がズラリと御列席になつてゐるので恐懼して大切な場所のみお話申上げた。ところが第二回のニュース映畫も屆いて又もや御集會になるといふ、宮内省で御說明書の提出を求められたので、大體書いて差出すと、宮殿下の方で遠慮せずモツト詳細にお話申すやうに——といふ御希望があつたとかで私にも其旨が通ぜられた。

本山社長も同行して陪觀の光榮に浴してゐたが私が餘り大きい聲を出すので私の服の裾を引張られるのである。私が何事かと思つて振返ると社長は口には出されないが目で「餘り聲が大きいぞ」といふ風に見受けられた。私は合點々々して話をすゝめてゆき無事に御用をすませた。歸る車の中で社長は「けふは大變うまくいつたと思ふが君の聲は大き過ぎて失禮に當るぞ」といはれたので「あれは前日宮内省からの注文で餘り遠慮しないで效果

を擧げてくれ、といふ事でしたから」と答へると「さうか、僕は心配してはら〳〵してゐたよ」と如何にも安堵したといふ風であつた。

御童謠のレコード

三笠宮殿下が澄宮殿下と申上げた頃、まだ御學齡に達せられないのに御日記の代りに童謠をお作りになつて詩の宮樣童謠の宮樣として全國の少國民の敬慕しまつるところとなつた。あの御童謠の多くは私に御下賜になつたものである。この顚末は冊子となつて私が謹記し大阪毎日新聞社から刊行され、三笠宮殿下御成婚の時も奉祝の放送番組に此の冊子の一部を朗讀してしまつた。これも宮家でお許しになつたからである。

御作童謠についてはいろ〳〵なものが、少國民向きに造られたが音盤にも無論入れられた。本居長世氏が謹作曲したのである。處がレコードに御歌ばかり入れるのぢやいけない

といふので御下賜になつた由來や御童謠をお作りになる動機等を私が吹込む事になつた。

第一、御幼少の殿下に私が拜謁するといふことは無論皇后陛下（皇太后陛下）の上聞に達せなければならず、その順序がふまれて私の拜謁となり御作の御下賜となつたわけで、私は緊張してレコードに吹込み御作童謠の裏に入れられた。三四千枚賣出されたと思ふが關東大震災で工場も賣店も其儘になつて了つた。この音盤は當時としては割合に手際よく錄音されてゐて、私の子供などよく私の口眞似をしたものである。その子が今では航空學校に應召され陸軍少尉となつた。

過日、歸宅しての話に三笠宮殿下が學校にお成になつて倅は御接伴委員となつた、といふことで「實に立派な宮樣だ」と云つてゐた。其次にヒョツコリ歸つたのでドウしたのかと思つたら校長閣下と宮邸へ御禮にいつた。其かへりであると御紋菓を取出した。私は此の御紋菓をいたゞきながら懷舊の情、感謝の情に咽んだ。その頃のヨチ〳〵歩いたのが今は陸軍少尉である。子を健かに育てよ、といふ政府の勸奬の意味もよく分る氣がした。

實例篇

一、雪の日の鳩の親子

（起）……鳩の話をする、突然のやうだが昔は傳書鳩といひ今では軍用鳩と云つて單に通信のみでなく、いろ〳〵の方面に使はれてゐるやうである。鳩は昔から八幡樣のお使ひだとか日清、日露の役には箱崎八幡宮の鳩がみんな海外へ飛んでいつたとか取沙汰されてゐる。歐洲第一次大戰でも鳩は毒瓦斯の中をぬけてきて通信の任を全うしたといふ話もある。たゞ目の周圍が爛れた位ですんださうだが鳩の飛ぶ力は物凄く速いことが分る。それ前後から列國で鳩の飼養と訓練に力を注いだ。鳩の種類はフランスがいゝとかベルギーがいゝとか云はれたが日本では先づ「軍用鳩調査委員會」といふのが出來て中野で各種の鳩を飼つてみた。其の混血兒に日本に在來の土鳩の血を交ぜてみたり、いろ〳〵研究してゐるうち

に日本種の鳩の血が混つた鳩が一番風土にもあひ又勇敢であるといふ事が分つてきた。

（承）鳩でも日本の土鳩の血液が流れてゐるのでなくては駄目なわけです。……菱田少將といふ方が調査會にゐられて中野の本部まで鳩を飛ばしてみるから何か通信文を書け、何分以内に共通り電話でよむから速度が分るだらうといふ事であつた。これが緣で、新聞通信にも鳩を實用してみよう。お前は動物が好きだからやれといふことになつた。先づ鳩に對する愛護心を普及しなければいけない、赤い脚輪のついた鳩をポン〳〵獵銃でやられては堪らないといふので、菱田少將と共に此の運動を兼ね鳩の講話をして歩いた。水戸、宇都宮、前橋といつた處へゆき、鳩を何十羽か放す。その時に學生などに通信文を書かせる。鳩が中野へ到着すると至急電話で通信文を讀む、といふ風であつた。前橋から三時間餘りかゝつた。まだ初期だから鳩も馴れない。天空を群れて二三度廻はり一方向へスーツとゆくのは感のいゝ方で、屋根や野原へ下りたり道草をくふのはダメだ。あとで別に分けられて了つたかと思ふ。いよ〳〵實用になりさうだといふので新聞社の屋上へ鳩の飼養舍を建

てた、いろ〳〵訓練をする、それには軍から專門家を分けてもらふことにした。鳩は卵を必ず雌雄二個づゝ生む、さうして一夫一妻だ。相手の鳩が死んで（よく日比谷公園の上あたりで白晝鷹に食はれることがある）一夫が外の巣へでもはいると、鳩舍全部の鳩が怒つて其の一羽の鳩を嘴でいぢめる。鳩だつて斯うなんです。人間として耻しいことは無論ありますまい。そこで話は飛躍するが、

（轉）鳥も通はぬ八丈ケ島——といふが實は鳩が通ふのです。畏くも　天皇陛下が八丈ケ島へ行幸遊ばされたことがあつた。その時陛下御安着、その他の御模樣をいかに通信すべきか、又寫眞を送るべきか、といふ問題になつた。普通なら汽車汽船の便によるのだがこれぢや遲い。一番早いのは飛行機だが、これとて飛行場を要する。殊に陛下が八丈ケ島にゐられる間に眞上を飛ぶといふことは懼い、そこで鳩を使ふことにして八丈ケ島と東京間を訓練した。通信文だと一羽が四匁位は運ぶが寫眞のヒルムをドウするか、先づ萬年筆みたいな筒をつくりヒルムを未現像の儘入れてネヂをする。それを鳩の背に負はせゴムの糸

で腹へかけて縛る。サテやつて見るとうまくゆく、十時間かゝつたのが、八時間位になる。これなら當日はうまくゆくだらうと記者寫眞班と共に鳩係もいつた。

來た〳〵、成功だ。果して六時間幾らといふレコードをつくつた。早速夕刊記事と寫眞も間に合つた、これが大評判になつてどこの新聞通信社の屋上にも鳩舍をみるやうになつた。

陛下の行幸のことはこれだけとして皇室に於かせられても鳩舍を御備へになつてゐるといふことを承はる。殊に畏多い話ですが　皇后陛下には久邇宮家にまし〳〵た頃から鳩に御興味をお持ちになり、御學問所の一部に鳩舍をおつくりになり、鳩を日夜御育てになつてゐた。

ある雪の降る朝、御學問所に御勤めする後閑菊野といふ女性、この方から直接伺つた話ですから恐らく間ちがひはないと思ひますが――ある雪の早朝、今の皇后陛下、その頃は良子女王殿下と申上げてゐた。雪の降るのもおいとひなく御庭に出られたと見えて雪が降りしきる中を御居間へ御歸りになつた。後閑さんも吃驚して雪の降るのにドウ遊ばしまし

たと申上げると、にこやかに御笑ひになつて、さう心配しなくともよろしい、きのふ鳩が子を生んだぢやないか、それを今朝思ひ出すと雪は降るし可愛さうだ、若し凍えることがあつてはいけないと思つて懐爐を鳩の巣の中へ入れてやつてきた――と仰せられたさうであります。

（結） 話はこれだけであります。諸君は　皇后陛下の御仁慈が國民に及ぶだけでなく禽獸にも及んで、而も雪の朝に御躬ら懐爐を鳩に、鳩の親子の巣に、入れておやりになつた。この一事だけで諸君はドウ御感じになりますか。私は新聞記者ですから教訓めいたことも說教も出來ません。たゞ事實を申上げるので、事實からドウいふ點を攝取されますか。鳩といふ小動物も訓練次第では文明の利器と稱さるゝ以上の働きをするといふ事。　皇后陛下がまだ御學問所にあられた頃と申し乍ら、雪の朝の鳩子の上に思ひを致されて、御躬ら懐爐を入れておやりになつたといふこと――これだけでも諸君はよくぞ日本の國に生を享けたといふよろこびを感じませんか。――（下略）（昭和五年、神奈川縣社會課主催講演會の筆

記の一部）

二、柿の木に手をかける

（起）（前略）俳句の作り方とか、季題とか、さういふ實際の話は先輩諸氏に就いてお聞きになればよろしい、私はどういふこゝろで俳句を作るかといふ事だけお話したい。

俳句にも政治は必要です。政治といつても何も選擧運動をするとか、況んや買收の手先になるなど凡そ俳句を作るこゝろと正反對の方で、國家の目的、國家はドウいふ目標を目ざして進むか、上古以來神國日本としての精神が萬葉集となり、やがて和歌の流行となり軟弱な和歌は捨てられて寧ろ滑稽味のまぢつてゐる連歌となり、そこに十七字の俳諧といふものが發生した。しかし夫れは時代的にもよくない半ば遊戯的のものであつた。それが

元祿時代にはいると松尾芭蕉が現れて、俳句と人生といふものをしつかと結びつけて了つた。即ち日本の詩の一部である俳句の傳統が芭蕉に至つて始めて確固としてきた。

この連歌時代は桃山期に及びあらゆる工藝美術の面も秀吉といふ大きな存在から進歩發達したが、千利休といふ茶人も出て先づ貴族階級に草庵の茶といふものを叩き込み、わびとかさびとかいふ美は金殿玉樓よりも田園にあるといふ事を如實に示した。右も左も天も地も整頓した姿勢で何のさびもわびもない物を珍重してゐるのを見ては——それは陶器の花入ですが、金槌で片耳をグワンと落して萬全なるもの必ずしも美しいものではないといふ事を示した。一種の禪ですな。又澤山茶碗が出來た。門弟達へやるといふと、我も〳〵と茶碗をもつていつて一番最後に一個の茶碗が殘つた。利休は「これが一番いゝ茶碗ぢやないか」と自分の所有にして「木守」と名づけた。木守といふのは柿が熟して皆とつたが種柿にするのか一番最後に一個梢に殘しておくのをいふらしい。詩ですね、詩のこゝろがあれば茶といふものがわかる。茶、即ち詩で、茶人は必ずしも老人であり隱居のやる事や

嫁入支度にやる事ではない。むしろ若い人からやつてゆく、茶の湯といへば隱居仕事の特殊のやうに考へられたのは邪道に陷つたからで俳諧が墮落して床屋俳諧となり月並俳句となつたのと同樣、また時代も同樣です。

（承）そこで利休といふ人はどういふ人か。此席は俳人ばかりゐられるから細かい詮議は止しますが堺の人で初め千與四郎といつた。後には秀吉の側近に出入して、商人としても豪雄を以て聞えた島宗室とか神谷宗湛とかは其の門下です。秀吉が大明を攻めんとして先づ前線基地たる三韓に兵を出したのは利休や其門下の貿易商であつた人たちの話や計畫をきいたからかもしれません。後に利休は秀吉の勘氣を蒙つて切腹をした。其の切腹のやり方も變つてゐたらしい。此人が美術工藝をよく咀嚼し、建築から築庭、煙草盆から布の色まで利休茶とか下駄にも利休といふ名がつく位、あらゆる生活に實用と美とを取入れた。ある意味では立派な偉人傳の中へ加へられてよいかと存じます。いろ〳〵逸話もあるから今日は其一つだけお話する、その斷片的な話の中から或る何物かを汲み取つて下されば私

の駄辯も駄辯でなくなるわけです。

（轉）千與四郎と題する横山大觀氏の屏風が、曾て院展へ出て評判になつた事がありませう。あの構圖は一人の前髪姿の少年が茶室へ通ふ露路で、茶室内の主人が師匠に對してゐる。露路の柿の木の葉は皆紅葉黄葉し人の通ふ道へも花の如く散り敷いてゐる。といふ圖柄だつたかと記憶します。これです私の話題は？　與四郎は此の日師匠の紹鷗から客が見えるからよく掃除をしておけと命ぜられた。茶の方では「和敬清寂」といふ事をやかましくいふ。和は卽ち相和する、聖德太子樣も十七ケ條の憲法の第一章に「和を以て尊しと爲す」と仰せられてゐる。敬は尊敬です。神は勿論佛もさうです。長上、師父母、その時々の客にも敬といふ事を大切にしてゐる。茶儀は皆和敬が因となつて組立てられてゐます。

その次の「清」が今日の話の眼目です。清は清掃する事ですが清々しいといひ、文化の始まりは「清」から起るのぢやないかとすら私は思つてゐます。清は心のうちにもあれば目に見える「清」もあります。茶は心の内外の「清」が必要なのです。夫れで最もやかま

しく申します。

利休はハイと答へて露路の苔の上から石まですつかり掃除をした。清掃といつても石についたを苔を落すのぢやありませんよ、苔の上にある目に見てむさくろしいものを清掃したのですな……掃除はすんだが夫れからドウしたかといふと彼は庭にある一木の柿の木が紅葉してゐるのを見あげて幹や枝に手をかけ一寸ゆすつたんですな、するとハラ〳〵と美しい葉が青い苔の上に落ちた。而して紹鷗に向ひ「只今掃除はすみました」と報告した、紹鷗も去るもの「なか〳〵よくした」と褒めた。その瞬間が、大觀氏の畫面に出てゐるわけです。

（結）これだけしか話はないのです。柿の葉を散したところは正に技巧で、他人が眞似をしてやつたとて效果はありません。利休に秀吉が朝早く朝顏の花を見にゆくと前日いつたサテいつてみると垣の朝顏は皆むしられて一花だにない。失望したが茶席にはいつてみると床にタツタ一輪の朝顏の花が生けてあつた。利休は滿身の熱と客をもてなす總べても此

一輪の花を捧げたのですね、俳句だつて、あらゆるものを犧牲にして其の眞髓を强調する事に依つて成功する場合がありませう。又極めて平板な俳句だとて一本の柿の木に手を掛けてゆさ〳〵と搖する技巧で俳句全體が生きてくるといふ事もありませう。要は各人の修養と心構へです。人の眞似をしたとて、芭蕉や子規の眞似をしたとて結局は猿眞似です。青年は青年らしく、心の修養と句作の練習をして、其後に於て柿の木を搖するべきでありませう。柿の葉を落したのは利休の創作です。諸君は何を以て創作さるゝのであるか、選者として刮目して期待する次第です。（昭和十二年秋、秋田魁新報俳句大會席上）

談片篇

一、二度なすること

講演は無論であるが演藝放送に於ても對話、朗讀、その他、話術を必要とすることが多い。東京の有志の間にも話術に就て研究さるゝ會があつたが放送協會で話術研究會を催すことゝなり昭和十五年の夏頃から數十回を重ねてゐる。德川夢聲、市川八百藏、大河內越山、神田伯龍、汐見洋、御橋公、青山杉作などいふ演藝者もあり又河竹繁俊、神保格、水木京太、その他いろ〳〵の方が講師になつていたゞき研究をしてゐる。會社の重役とか實業家、青年男女、辯護士といつたやうな人が毎會一ぱいである。

いろ〳〵有益な話があるやうだが、私は忙しくて一二回しか傍聽しない。たゞ報告をきくが中に斯ういふ話をした方があつた。

重點のところは二度なする必要がある。

これは私自身も教はつたわけではないが、よくやつたことで、一度滔々とまくし立てただけでは大衆にわかりかねる。二度くり返すと初めて納得がゆくといふ風である。

又、私は講壇近くの人に判つたことを、わざと問ひかける、其人はまごつくが「さうです。三里ですなア」と答へてくれる。こゝで大衆は息を吐く。「さうです、三里の道を通學したのです。」と念を押す方法もある。これは講演のみでなく教壇人も同様である。

二、思はぬ御膳

これは少し自慢めくが——。

英國皇太子が日本を訪問、北は日光から南は鹿兒島から出帆、こゝが日本とお別れといふことになつた。多くの新聞、通信、映畫の人々がいつたが鹿兒島へ宮島から殺倒した。その節縣だつたか、市だつたか慰勞會があつた。

東京の記者團が一番遠いから代表して挨拶しろ、といふ事になつた。それが而も私に當つたのである。

私はみんなを代表したつもりで謝辭を述べ私個人の所感を一寸つけ加へた。すると妾半ばにして女中頭らしいのが「一寸人が來たから別室へ來て下さい」といふのである。別室へいつてみると十人許りの膳があるだけで誰もゐない。ドウしたのだとまごつく私を正座に坐らせて女中頭がいふのである（其時は女中の手の空いたのがみんな來てゐた）其のいふ事は、私たちは長いのは二十年三十年と此家に奉公してゐて何百度となく宴會の挨拶といふものを聞いた。然し今日はあなたの挨拶は初めて私どもにもよくわかり、大變いゝ氣持で、さうして日本々土のおしまひに住んでゐるが色々お國のために盡すべきこと、西鄕どんとちがつて女も御用のあることを聞いてサツパリした氣持になつた。あなたは氣がつ

いたかドウかしらないが私が呼んだものだから廊下も人で一ぱいでした。料理人も女中も番頭もみんなゐたのです。それで御迷惑でせうが御飯を差上げる時私共が一つ心を入れて進上したい、といふので手の空いた者だけ集りました。悪く思はないで召上つて下さい、といふのであつた。

無論私は厚意を謝して食事をした。書かでもの話だが私の旅中變つた印象を受けたから忘れぬうちに話しておく。

三、ニュース講演

關東大震災の時は、新聞の發行が一時停止したのだから「これは紙でなく口で報道すべきだ」と私は主張した。東京市内外はメガホンを持つて各班に分れてくり出した。私など印

袢纏の上に繩で帶をしてゐた。大火災の大體の模樣もだが、人心を安定せしむる必要がある、といふ事が一番にあたまにきた。帝都は斷じて移さるゝ事はない。御模樣、といふニュースと燒けた處より燒けのこつた方面の樣子を速報させた。避難した人たちは私たちの車が動かないほど詰寄せて來て質問したり安心したりした。「風評に迷ふてはイケない、治安は大丈夫だから」といふ事も傳へた。

このメガホンによるニュースを思ひついたのは此時もだがパルチザンの兇暴で日本の男女がシベリヤの一部に監禁され、非常な慘虐な目に遭つて死んだ。此のニュースは新聞のみではいけない、と思つたからであつた。

丁度この朝青森からの急報電話がかゝつた、N特派員からである。彼は現場を見るや小樽へ引返し、北海道でマゴ〳〵するより青森へ引返して通信を讀み出した。その電話口に偶然私が出て通信を筆記したのである。

私は「號外、號外の用意」といひながら鉛筆を走らせてゐた。原稿が切れやうとする前

に「オイN君、君は東京へ直行せず、水戸へ下車してくれ、私が水戸へいつて講演の出來るやうに支度しておく」と云つて電話を切つた。

水戸出身の人が多く兇難にかゝつてゐるから直ぐ水戸で講演をやり、現場を見た人が其儘を傳へる事が一番いゝと判斷したからである。

號外を出すが否や私は水戸へ急行した。而して會場も借りポスターも貼らせた。果して押すな〳〵の人で、N君の講演中遺族であらう、泣きながら「モツと聞かせて下さい」と詰寄つてくるものもあつた。パルチザンの殘忍さは此頃からやかましくいはれてきた。

四、大隈侯と伊藤公

亡くなつた大隈侯爵は雄辯の政治家として知られてゐた。口をへの字に結んで隻脚なので杖を突き演說に上る時から已に異彩があつた。聲量もあり氣宇を呑む概があつて侯の講演は大衆の喝采を博したものである。

また伊藤博文公も雄辯といふより政治家として、明治維新の功臣として先づ貫祿が物を云つた。公は講演前にウヰスキーを一寸口にしたやうだが次第に熱してくると双手を背後に廻し半巾を後ろ手に搾りはじめる、私共はソラ搾り出しが始まつたぞといつたものだ、こゝが焦點で最も熱した時である。朝鮮統監として在任當時よく聞いたものだ。

永井柳太郎氏は小大隈といはれる位に大隈侯に親炙し、又脚のわるいところや演說の調子が似てゐるが今日では永井氏獨特の一種の調子をもつやうになつた。同氏に初めて會つたのはロンドンの正金銀行の窓口であつた。同氏はパリから歸り私はパリへ赴くので金を引出しにいつたのであつた。「ア、小野君ですか」と馴々しく話しかけられたが其刹那私は此人の齒並がよい。きつと聲量もよく聲質もよいにちがひないと感じた。

齒を見れば話がうまいかまづいかわかる。健康さはいふまでもないが齒は大切である。

今日の私のやうに奥齒を幾本も失つては齒全體がゆるみ何も話すことが出來ない。口の私は死んだも同然で散々のていたらくである。

五、唐宋の文明は日本に

北京大學の教授をした辜鴻銘翁が日本に來たので學者としての彼の講演を日本でさせたいといふ企てがあつた。代議士になつた薩摩雄次氏や二三一行に加はつた。辜翁は佛印あたりで生れ、廿七歳で初めて漢字を覺えた。さうしてイギリスにも留學したが「論語」とか「春秋」とか相當むづかしい書の英譯もやつてゐた。日本婦人のサダ子といふ人を夫人にしてゐたが此婦人を通じて日本の武士道といふのに傾倒して「唐宋の文明は支那では亡びて日本にのみ殘つてゐる」と口癖のやうに云つてゐた。又辨髮を見せては「忠孝のネク

タイ」と威張つてゐた。翁の眼玉の特徴など芥川龍之助氏の北京旅行記みたやうなものにあつたかと思ふ。翁の演說の草稿は英文なのだがタイピストが終日かゝつて幾行も出來ないといふ風で、草稿に苦心したものである。

仙臺、青森、秋田、山形など巡講し、私が前座をつとめた。青森では女子師範の講堂を借りたと思ふが翁の順番になつて講演はしないといひ出した。わけを聞けば「あんな小さな女の子に自分の話がわかる筈がない」といふのである。それはちがふ。一二年生は小さくみえるが皆入學試驗を受けて入學したのだからとヤツトなだめると翁はやをら起つて「皆さんは私の此のチヤンコロ姿を見物に來たのでせう」と一喝し「このチヤンコロは忠孝のネクタイですぞ」と辨髮をつまんだ。翁は一種の氣慨をもつてゐた。

秋田で疲れたので、慰勞宴をやると翁は揮毫した。實に恬淡たるもので自分の署名を忘れたり書きたい字が餘つたり字體といへば奇古とでもいふべきであらう。翁はドウかすると死んだサダ子夫人の事を言ひ出すが御給仕に出た老妓をみては「カレキモ山ノニギワイ」

位の日本語は使つた。

秋田から山形へ向ふ汽車に、一人の長髪と婦人が乗り込んだ。即ち竹久夢二と山田潤子である。二人は喃々と何か話してゐると突然翁は「ハイカラにつけるクスリはない」と日本語でやつた。二人もこれにはまゐつたらしいが私共も苦笑した。

翁の講演は深遠な理念をわかり易く話さうといふのであつた。忠孝といふ事をやかましく云つた。

この旅行が終つて翁の消息はたまにしか聞かなかつた。ある日、日比谷公園を通りぬけやうとすると翁はベンチの上に横になつて「忠孝のネクタイ」を弄んでゐた。

座談と講演

1、結婚席上にて

私は異例かもしれませんが本日の新郎新婦の爲めに媒妁人として、又貧弱ながら先輩として、双方兼ねて御挨拶申上げます。

甲野乙郎君と丙田丁子さんとは本日めでたく結婚の式を神前に於て擧げられ滯りなく式も終つたことを御報告申します。實は此の緣談は私たち夫婦が媒妁したといふものゝ本當は新郎新婦の父君同志の話合ではじまり、而して進行していつて、めでたく本日の式となつたわけで、私たちは謂はゞ途中から飛込んで少しおせつかいをしたに過ぎません。本日この大任を無事果させて下さつた兩父君に媒妁人として厚く御禮を申上げ、めでたく式も

すんだことを御兩家のため深く御喜び申上げます。私も隨分仲介を賴まれましたが今度の如く兩家の主人がお互ひに話し合はれたといふことが異例のやうなものゝ實は兩家で肚を割つてお話合ひになつたもので、他人が兎や角申上げる以上の最高度の神聖なもので今更私から永いお話をする必要などない次第であります。

甲野家や丙田家について事新しくわざと申上げません。共に同じ鄕土に根を下された舊家であつて、新郎新婦の身上についても一々申上げなくても御來臨の諸氏はよく御存じでありわざと控えます。

考へてみまするに同胞と申しはらからと申しますが鄕土を同じくする以上詳しく調べれば先祖の代に於て已に親戚であつたかもしれません。兩家にまゐりまして先づ目につく大黑柱のくろ〳〵とした時代の艶と申しますか、あの柱と柱とを拜見したゞけでも血潮のながれを感じさせられます。甲野君は逞しき青年として鄕土のためいろ〳〵汗を流されてゐる。昨日も東京の學校生活の話が出ましたが「青年時代の一種の行をしたやうなものだ」

と感想を述べてゐられました。全く人生は行の連續です。精神の修練も農事も亦甲野君の趣味も皆行の變形です。この行を實行に移して祖先に耻ぢない今日を致されてゐる兩家の父君御夫婦が已に新郎新婦の鑑であつて、言葉よりも、躬を以て示されてゐるのであります。私は丙野孃が或る冬の朝神社詣をされる時に一緒になりましたが、清水の御手洗の前で氷も張るかと思はれる冷たい水に形式のみでなく手を深々と入れて、よく洗ひよく嗽がれたのを拜見しました。其の時この方の敬神は形式一片ではない。心から敬神の念をもつてゐられると感じました。手を淨め口を嗽ぐといふことは卽ち清潔の清です。神を敬するも父祖を尊ぶも又家族相和すのも生活するのも皆清(せい)にはじまります。安心して私が仲介の役を引受けた點もこゝいらの氣持が多分にあります。甲野君の骨惜しみしない態度といひ丙野孃の清らかな心境といひ必らずや一家を守り立派な日本國民となつて君國の爲め良夫良妻たること間ちがひなしと信じたからであります。どうか諸君におかれても新郎新婦の將來について御厚意あるまことを寄せられ立派な國民の夫婦を、又家をお育て下さるやう

に祈ります。

終りに此の席上行屆かぬことが萬々ありはしないかと兩家からお詫びしてくれとの御依賴もあり、又媒妁人として到らぬ事が多々あるであらうことを深くお詫びします。

2、人生の大道

先刻、御手許に小さな印刷物をさし上げました。これにより新郎新婦の人と爲り其他御承知願ひます。

たゞ本日の佳き日に兩君の結婚の式が無事終了した事を御報告申上げ今後新夫婦の踏み出す新しき道に何分の御扶けをいたゞきたいことを御願ひ致します。幾ら元氣があると申しても皆様の御力添がなくては人生の大道を濶歩してゆくといふ事は大變です。どうか私からも新夫婦に代つて篤く御願ひ申上げます。（昭和一二、於上野精養軒）

3、飛行詩人を悼む（口述）

佐藤章君の靈に告げる。

東京の友人を代表して私は君の遺骨をこの秋田縣の君の鄕土へ捧げてきた。今こゝに君の靈と永訣するに臨み一言君との交遊に觸れさせていたゞきたいと思ふ。君の嫌ふ泣き言はいはない。併し友人としての別辭は享けてくれると考へる。

君と初めて知つたのは所澤の飛行場だつたと思ふ。君が民間の飛行士として未だ名を世間に知られなかつた頃だ。私は所澤に俳句の會があつていつた。飛行場を見學してゐると誰だつたか乘らないかといふ。私は直ぐ乘らうと君の機體の方へ歩いていつた。その頃の

飛行術は幼稚なもので危險率の方が多かつた時代だ。私は和服に足駄を穿いてゐたが風が強いから、といつて誰だか鳥打帽を貸してくれた。私が乘つてバンドを締めると俳友たちが「遺言はないか」とか「もう酒はのめないぞ」とか冗談をいつてゐた。私はニヤ〳〵笑つてゐた——といふのは操縱席にゐる君が愛嬌のある顏で私の樣子をみてゐたから何となく安心した氣分があつた。

動き出すと其頃の飛行機の馬力は頗る弱い「重い〳〵」と君はいつてゐるうちに上翔した。私は君の話をきいて「君は秋田ですな」と直感して云つたら君は「あなたは知つてゐますよ」と笑つてゐた。

君との交遊はそれから深くなつていつた。君が郵便飛行で東京大阪間の第一着の榮冠を得た時、民間でも大變な評判であつた。私は君を東日の玄關に迎へるとドヤ〳〵と群集が來て而して「佐藤君を紹介して下さい、私たちは秋田縣人です。歡迎會をやりますから」といふほど秋田縣人は君を知らなかつた。今にして思へば君の日記にある如く鄕土に訣別

して空に志を立てゝ上京した君なのであつた。

飛行機では君とお互ひに苦勞した、信州の高原も飛んだ、川中島でも飛んだ、善光寺へ參詣した時、君をチャツプリンと惡童は綽名し、私をデブとはやした。日本アルプスを第一に横斷したのも君であつた。君には大きな理想があつた、それは自分の設計した飛行機で福岡から上海へ飛びたい、といふ決心であつた。そこへ秋田縣人が秋田號を造らうと亢奮した、君は秋田縣下へ晴の歸鄕をした、縣下のあちらこちらと飛び歩き學校では航空知識開拓の講演をした。××君も二ヶ月位一しよだつたらうが私も半月ばかり其の爲め秋田へいつてゐた。

いよ〳〵秋田號が出來かゝつた。私の鄕里福岡から、上海へ横斷する計畫もすゝめられた、ある日、突然「佐藤君が墜落した」といふ電話がかゝつてきた、私は君が墜落？　バカなと思つたが直ぐ自動車を飛ばせて津田沼へ急行した——が殘念ながら事實であつた。君は此の日門下生に操縱させ君は後方にゐて指導してゐた、何か事故があるとみるや君は

手を操縱桿に觸れたところが門下生は一生懸命堅く握つてゐてドウにもならなかつたらしい、と專門家は推斷してゐる。要するに君は門下誘導のため命を墜したやうなものである。

本來なら君が日本の民間航空に盡した事蹟等を擧ぐべきかしれないが、夫れは他の方々に讓らう、私は君の日記や遺稿をみて君が長詩を澤山作つてゐることに驚いた、君は詩人であつたのだ、空の詩人であつたのだ、君は科學的な一面詩人の空想と熱情をもつて航空界に身を挺したのである。

佐藤君、いま君と永訣する。聞けば秋田號を製作した餘りの金で君の詩を出版し又は秋田の千秋公園に君の銅像を作らうと話が持上つてゐるさうだ。やがてはすべて事實となつて現はれやうが幾ら詩集や銅像が出來ても君は地上に生存しないのだ。それが淋しい、戀しい、悼ましい、しかし夫れは私だけの感情かもしれない、公人としての君は「俺は月まで飛んでゆくのだ」と微笑してゐるかもしれない。

今、君の柩の周圍に會葬されてゐる人々は、君の幼時からの知己もあらう、君を背負つ

た先輩もあるだらう、皆さんが君の死を悼んで悲しんでゐられる。私は此上女々しい事はくり返さない。どうか君らしく安らかに逝つてくれたまへ。日本の航空界は君を失つたが君の死がどれほどの刺戟となつて後から後から第三、第四の君が現はれてくるであらう。その事は安心し切つてくれていゝ。（秋田縣仙北郡、金澤西根村、佐藤章氏葬式席上にて）

4、和風翁の靈前にて（口述）

安藤和風さん、私は今、あなたの柩の前に立つて一度は呆然とし、やはり夢でなかつたと知つて愁然として永訣しなければなりません。

安藤さん、あなたを初めて知つたのは明治四十二年の夏でした、それ以來いろ〳〵の事でお世話になりました。私が衆議院議員の選擧に推されて出馬しようかと思つた時、一本の電報で止めて下さつたのもあなたでした。

私の我儘な俳句を其儘うけ入れて下さつてあなたの選をしてゐられた魁俳壇を私にゆづつて「しつかりたのむ」と激勵されたのもあなたでした。

あなたは秋田魁新報の心軸であり社長であり又記者でした。あなた自身人を訪問して記事にされるし、而して主筆なり社長の事務をおとりになつてゐた。私如きが秋田へ來てもあなたの御來訪をいたゞき答禮に出ようと思つてゐると新聞にモウ私の談片の記事が出てゐるといふ風でした。

あなたの死は惜しい、魁一社のためでない、縣のためにも國のためにも實に惜しい、私はあなたを偉人と思つてゐる、德富先生はあなたを「秋田の賴山陽だ」といつてゐられた。雪の中を東京から會葬に來たのも偉人としてのあなたに永訣したかつたからです。

あなたが養成された後進は續々ある、秋田は文藝國と昔からいはれてゐるが魁新報も文藝國の代表新聞に反かぬだけの力量と前進をもちつゞけてゆくにちがひありません。

安藤さん、左樣ならをします。謹んで日頃の御愛顧を謝し御冥福を祈ります。

（秋田魁新聞社講堂にて）

5、句碑除幕式にて

御挨拶申上げます。本日は私の爲めに故鄉の此の砂丘の上に分に過ぎた句碑を立てゝいたゞきまして、斯くも多數有志の御列席を得ましたことを、一代の光榮として深く感謝します。

實は東京で私の周圍にゐる俳人の一部の人が「句碑を建てようと思ふ、思はぬ各地にお前の碑が立つてゐるのに生れた故鄉にないのはおかしい」といふ話がありましたが私は堅く辭退しました、碑といふものは後世にのこるものであるが、私如き程度の俳句を作る人は幾らでもゐる、それを事々しく碑にする氣にはなれない、といふのが私の考へでありま

した。それから半年ばかり經つと「君はあんな事をいつてゐたが實は句碑の計畫はひそかに進んで君は句さへ書けばいゝのだ、萬一碑が建たないやうな事になると自分らの面目が立たない、君は一枚の紙に句を書き給へ、それでいゝ、何もいふな」といふ次第で、否應なく私は句を書かせられました、それも千住の石材會社へいつてみると九割方石組みも碑石も出來て居り、銅版の句を入れる部分だけが空いてゐる事を實見したからです。

私は句だけ書く、一切は知らない、いゝやうにしてくれ、といふ事で話はすみましたがサテ句を書く段になるとドウしても故郷の感じを出したくなるものです、いくら考へてもいゝ句がない。それで發起人に斯ういふ條件をつけました。「一旦書くといつた以上は書くしかし私のは裏面にしてくれ、それでないと氣がすゝまない」と申しますと「それぢや表面はドウするか」といふおたづねです。「表面には、私の家の額になつてゐる東伏見伯爵樣の「以和爲貴」といふ字にしてもらひたい、畏くも東伏見伯爵は　皇后陛下の御弟君であり久邇宮家にあられた、久邇元帥宮殿下は私如きに一方ならずお目におかけ下されたし、

又東伏見家に宮殿下として伯爵樣がゐられた頃からもいろ〳〵と御世話に預つた、それに以和爲貴といふことは聖德太子樣の憲法第一章にもあり當然表面に揭げていゝと信ずる、」と申しますと發起人も贊成されて、東に表面が彫られ西の裏に私の句があるわけです。この外清浦伯爵が私の爲めに銘などお書き下さいましたが、これらは決して私がゑらいのではない、東伏見伯爵樣の御德に依るもので私は此地に生を享けたといふだけで裏面に心ばかりの拙い句を書いたに止ります。

先刻來、先輩の方々や小學校の校長さん方から御祝辭をいたゞきましたがドウか私の心境をお察し下さいまして、此碑は私の句碑といふより別の意味の句碑である事を確と御諒解願ひたいのであります。今日は決して俳句論や文學について語らうなど潛越な事は考へてゐません、たゞ發起人、建碑實行委員、及び御祝辭をいたゞいた各位へ深く感謝の意を表します。

ついでにドウしてもお話申したいことがあります、それは御差支があつたら御許しを願

ひますが此句碑が四十數個の荷物となり東京から積出されて、九州の此の海岸に着きました。委員の都合で本日除幕したいといふのですがなか〳〵仕事が進捗しないで毎夜十二時過まで工事がすゝめられました。照明が必要なのですが漁業組合の御厚意で漁業用のランプを毎夜貸して下さつたさうです。又ある夜など蚊が澤山出て工事する人々の能率を妨げる……さうすると一人の男の方が松葉を掻き集めて炊いて下さつて、十二時までも二時までも、委員の方が名前を伺つてもいはれない、たゞ私と同級であつたといふだけでした。事實はこれだけです。併し地方人は純朴だと申しますが、今度のやうにランプを貸して下さるとか、松葉を炊いて下さるとか、一見何でもないやうなものゝよく考へると鄉土愛とでも申しますか、何ともいへない味があります。私達はこの味がなくして何が鄉土ぞと申したくなります。つまらぬ事ですが名を明されぬ方や組合の方へも心からなる御禮を申し上げます。（福岡縣芦屋町にて）

6、藝といふこと

今日は寒いなかを折角御來觀いたゞきましたが私の所藏してゐるものなど誠にお恥しい物ばかりで、萬一何らかの御參考になつたら仕合せに存じます。

何か話をしろ、といふ御希望ですが私の宅の物をみていたゞいて話するといふ事は何だか自慢たらしく聞えますので品物に就てゞなく何とはなしに聊かの感想を御挨拶代りに述べさせていたゞきます。

實は昨夜或る家で鼓を見ました。ポン〳〵と打つあの鼓ですね。私には鼓はわからないたゞ鼓の胴に足利時代か桃山時代の蒔繪があるといふので見たくなつたのです。さて胴を

みると立派な蒔繪である。而も胴一ぱいに宇治橋を一直線に描いてある文様です、その鼓が明かに桃山期以前の技巧をみせてゐて、立派なものでした。賣るのか、といふと好きで求めたのだから賣りたくない、と云つて「此の胴に皮を合せるのに苦心しましたよ、胴が古いので皮が新しくてはおかしいですから」と申します。御承知の如く大鼓は火で炙つて打ちますから直ぐ皮が駄目になりますが、小鼓の皮は古いほどよいとされてゐる。私はつく〴〵皮をみてゐるうちに皮の面に人の指のやうな黒づんだ處がある。「何か模様がありますね」といふと「それは人の血です。鼓を打つた人の手の指の血です」といふのです。よく聞きますと今日でもやるやうに寒稽古をやる、鼓の師匠はやかましい人で物干臺で毎朝霜の降りてゐるうちに鼓を打たせる、稽古する弟子は男も女もありませうが一人の熱心な娘さんはとう〳〵指が裂けて血が吹くまで鼓を打つた、その指の痕だといふのです。どうしてそんなのを保存してゐるかと聞きますと「一つは藝熱心のまごゝろを買つたのです、一つは、こんな古いいゝ皮は血の痕のある位のものでないと胴にうつらない」といふ事でし

た。藝道に熱心な餘り血が吹くのもかまはず鼓を打ちつゞけた女性があつたのです、きつと上手になつたことでせう。

由來藝道といふものは鼓に限らず藝能に達した人ほど苦心のあるもので私は放送協會に入つてからも屢々さういふ事を痛感しました。

藝の上達といふ事は良心の精進といふ事に盡きます。例へば清元で近代の名人といはれる延壽太夫の如きは放送する前には十日以上の餘裕がないと引受けない、一旦引受けた以上は十日間猛練習をやるのです。名人といはれる人にして然りです。賴まれると直ぐいゝ氣になつてマイクの前で唄ひ出す人と用意がちがひます。

私が文藝部長をしてゐた時、どうして延壽太夫が承諾しないから私に延壽太夫に會つてくれないか、といふ事になつた。私も半ば好奇心から延壽太夫の宅にいつて何故出演しないのか、國家的にもめでたい日だから放送してもらひたいと話したのです。すると延壽太夫は「實は私も放送したいのです、併し私は唄ひたいものがあつた、それは昔からあつた

淨瑠璃ですが明治になつて櫻痴居士が加筆をして團十郎が踊つたものです、ところがドウしても私の腑に落ちない文句がある、文句の意味も腹に入らないで唄ふといふ事は私の良心が許さないぢやありませんか、夫れで其の文句の分るまで放送したくない」と申したのです。そこで唄ひ本を取出して讀んでゆきますと分らない文句といふのは「あはれ」といふ點でした、「こゝのところがあはれではおかしいです、いかゞでせう」といふので私も二三度讀んでゆくうちに延壽太夫と一味通ずるものがあつたか「あゝ、これはア、我だ」と期せずして二人が申しました。卽ち「嗚呼、我」で夫れを唄つてゐるうちに「あゝ、われ」が切れずに「あはれ」とつゞけて唄ふやうになつたのでせう。「よろしい、分りました。放送させていたゞきませう」といふことになりました。

上手とか名人とかいはれる人は日頃の心がけがちがひます、延壽太夫など放送室にはいると禮服正しく先づ宮城の方向に禮をします。これは今日誰でもやる事ですが延壽太夫たちは昔からさうでした、それからマイクに向つて一禮して肚を落つけ夫れから唄ひ出すの

です。これは何も延壽太夫に限らない、長唄の吉住小三郎とか稀音家六四郎とか松永和風とか皆同樣です。いつかおもしろいことがありました、小三郎は放送の日になると四時間位テストをやるのです。六四郎が三味線を彈く、その音をきゝわけるのですね、六四郎は三味線を膝の上におくか毛布を敷いた上に座るがよいか、椅子に掛けるがよいか、又マイクとの距離はどの位が適度か樣々なテストをやる、それを一々六四郎が聞いて愈々よいといふ位置をきめると今度は小三郎が聲を出す、夫れを六四郎がきいてモツト離れて！　とか右へ！　とか調節を圖つて初めてテストが終ります。これは唄ふものに就てゞありますが何でもないと思はるゝ一面に藝道の人々は斯くの如く苦心してゐます。

本日、多くの埴輪を御覽下さつたでせう、何れも上古の物で殉死に代へられたといはるゝ物ですが何れも五尺近くの人の像に形どつたものです。科學の發達した今日でも五尺からの土を燒くといふ事は大變である、よく料理屋など大きな土瓶とか狸とかありますが、あんな低級な藝術といへないものでも燒くには苦心がある。それを上古の我々の祖先は飽

きもせず澤山の埴輪や土器や瓦を燒いてゐます。亡くなられた正木美術學校長の像も陶器にしたが非常な苦心を拂つた結果だといふ事でした。大きいものになるとハヂける、ポンポンと土が裂けて爆發するのです。

私が燒物に手をつけた初期の頃、ロクロの空洞の物は燒きよいが私が指の先でひねつたもの、卽ち置物とか人形みたいな物を燒くには弱つた、卽ちハヂけるのです。その頃私は新聞社にゐたものですから歸つて土をこねるのは夜の八時過になる、燒くのも家人が寢しづまつてからです。苦心に苦心したものがパーンとハヂけて了ふと、ガツカリして了ひます、又二三日かゝつて作つて乾燥させる、燒く、ハヂける、幾度やつても駄目です。そこで私はヤキモノをする人に聞きにゆくと「ゆつくり燒けばいゝのです」と敎へられる、そこでゆつくり燒いても矢張破裂する、とう〳〵私も根氣がなくなつて原型は他人に造つて燒いて貰つて、釉藥をかけてから自分で燒かう、と狡いことを考へ出した。同時に良心がむく〳〵と頭を持上げてくるのです。「駄目ぢやないか、他人の燒いた物の仕上げをする丈

けぢや良心がなさ過ぎるぞ」と自問自答です。そこで又もや造つて燒き出したが矢張駄目これにはキツト何か秘傳があるにちがひない、敎へを乞ふて耻づる必要はないと思つて一人の職工の家を訪問し辭を低うして敎へを乞ひました。すると其の職工は「なアに、そんなにあたまを下げられんでもいゝ、何でもない、工夫一つですよ」と笑つて快く敎へてくれました。夫れは砂の中で蒸燒きにして次第に火力を强めるといふ謂はゞ甘栗を燒くのと同じやり方です。なアーンだ……といふ處ですが私の工夫が足りなかつたと痛感してサテ敎はつた通り燒いてみると一度で成功した。昔の人は何でもない事でもまごゝろをもつて工夫し工夫しぬいたのですね、私が何も苦勞しないで正面から燒いて失敗したのは當然である。

斯ういふ話は文學者でも工藝人でも澤山ありませうが熱と知識とが適當に融合して始めてモノになるやうです。科學するといふ、科學は學問ですが學問に人間が使はれてはおしまひ、學問を使ひこなす、卽ち身につけた曉に始めて科學がモノをいふわけです。

科學々々といふが科學で解決のつかない一種の神秘性のものがある。例へば宋代の白い釉藥でも之れを分析すると成分が分つてゐる、然し其通りやつて果して宋時代の釉藥の如きこつくりした白さが出るかドウかといふ事は怪しい、卽ち灰分の媒溶劑を作るのにドウいふ材料を燒いて灰分としたか、といふ問題です。灰分にはちがひないが雜草の灰か椿とか樫とかの樹木の灰か分らない。又灰分はいゝとして其日の風の向に依つて、どの程度の風壓で、どの向の風が吹いてゐたか、これも問題である。斯ういふ條件を克服してあれだけの物を燒いた工藝的良心と苦心とはたいしたものといはなければなりません。

柿右衛門の赤繪をやかましくいふが、果して赤繪で苦心したかドウか怪しい。それより胎土(ボデー)を先づ燒くといふ事が大變であつたでせう。支那大陸で磁器といふ白い物を燒いて日本でも喜ばれてゐる。日本でも黑いヤキモノを次第に白く〳〵と樣々な工夫をした、柿右衛門の磁器を燒くことに成功し九谷の發達となり瀨戸の民吉の染付となり會津本鄕とか方々で白い磁器を燒く時代となつた。

各藩で埴產興業といふ點から器を藩侯用、民衆用に燒いて他藩からの輸入を防がうと工夫した。私の「陶器全集」の第二卷に土佐の尾戸燒の「陶山紀事」といふのがありますが、あれを讀んでも野中兼山が藩の事業を興すため磁器を燒かすべく九州へ人を派したり、浮浪人の陶工を買收したり、日向のイスの木を灰にする爲め移植したり樣々な苦勞をしてゐる。これが高知の能茶山燒となつたわけですが藩の爲め、國の爲め斯くの如く苦心してゐる。薩摩燒でも會津燒でも出雲燒、萩燒、どこを調べてみても苦心の痕ばかりで樂に人眞似をして成功したといふ實證がありません。

食物でいへば菓子でも飴でも酒でも苦勞してゐる。十和田湖は周圍が十一里あるが魚は一ぴきもゐない、この湖に魚が棲んだらどれだけ美しく國產になるだらうと一種の夢をもつたのが和井內貞行といふ人です。私は「青年は須く夢をもて」とよく話しますが夢といふものゝ堅い言葉でいへば高い理想をもてといふ意味なのです。白いヤキモノの夢が柿右衛門や民吉となり十和田湖の魚の夢が今日の十和田鱒となつて、私が始めていつた明治四

十二年など釣糸を下すだけで鈎には餌もついてゐないのに、たゞ舟を漕ぐと一尺位の鱒が鈎にひつかゝつてゐるといふ位殖えたのです。和井内貞行氏は其時の苦心を話した、魚が湖水に上る爲に子の口といふ處に水路を開いた、即ち岩を切り開いて幾年も苦勞し金を湖水につぎ込んで了つた。「和井内の蒲はゞき」といつて蒲の脚絆が土地の人の笑ひの種になつた程熱中したのですね。今日では和井内翁は死亡し湖畔の人から神社に祀られてゐますが私は此の翁に親しく會つて苦心談を聞きました。青年の夢は十一里の山上湖が魚の産地となり柿右衛門の磁器となるのです。どんな大きな夢でも熱と知識さへあれば夢が實現します——今晩はこれ位で、不遜らしい點があつたらお許し願ひます。（蓼山莊座談會にて）

7、新聞の今昔

新聞の樣相がグツと變つてきて全國の新聞を統制しようといふまでになつたらしい。私どもが新聞を造つた時代は所謂自由競爭時代で中には「新聞は商品なり」と商品主義一點張に考へてゐた人もあつた。今日では新聞でも雜誌でも國家目的の線に沿はない限り、不必要なものであり存在はむしろ邪魔なものとさへ思はれてきた。これだけの戰爭をするからには當然過ぎるほど當然なのだが昔は政府の政策に進言するとか、鞭撻するとか、以外政策に反對する爲めの新聞すらあつた、即ち政黨といふものが國論を分裂させる事もあり自己や黨のための利害と政權にありつく事にのみ重點をおいてゐた弊害であつた。それが

今日では國論は統一され國策以外の何物も不必要時代となればムダな紙を食ふ新聞が減つてゆくのも亦當然である。

早大新聞研究會には、二三度私も講演にいつた事がある喜多壯一郎氏が統卒してゐた時代かと思ふ。その時は別に議論はせず、新聞製作の技術上の話を二三時間やつたり實習をやつたやうな記憶がある、私は其頃東京日日の社會部長をやつてゐたが其頃の社會部といふものは、今日の文化部家庭部まで一しよにしたやうな仕事をひつくるめてやつてゐた。

古い新聞を見ると市井の記事でも政治記事でも必らず、「記者曰く」の添書がついて教訓めいた記事であつた、明治初期の記者は一種の國士氣取りで社會の木鐸といふイミを正面から振かざし「教へる」といふ風な記述法であつた。それが次第に歐米風の興味中心的に編輯さるゝやうになり大正期に入つて益々ひどくなつた、私なども此の一番いけない時代に新聞を作つてゐたわけで今から思ふと背に汗する。

しかし今思ふても技術的には錬達の人がゐた、記事を書く速さ、うまさも學ばれたが、

名士の寫眞を撮る事など到底出來ない相談とされてゐた——さういふ進歩工夫が今日のニュース映畫や寫眞の人々を刺戟し或は基礎になつたかしれない。

その頃の新聞記者は必ず外に目的をもつて新聞記者は腰かけのつもりでゐたやうだ、文學者になりたいとか、畫家になりたいとか、夫々青雲の志を立てゝゐたやうである。現に私だつて廿一歳の時ドイツ文學をやらうと思つて上京したら「先づ新聞社にはいつてからにしろ」と先輩に教へられたものだ。

鉛筆や筆で早くおもしろく書くといふ事も練習させられた、階下の營業部の電話で二階の編輯部へ通報するのを書くのだが皆競爭に加はつた。そのおかげで私は四十歳頃までは速記者に負けないほど早かつた、速記すれば又符號を直すのだから初めから筆記する方が早いわけである。四百字詰の原稿紙で材料さへあれば百五六十枚は一日で樂に書く。要するに錬成といふことは大正年間の新聞時代でも相當にやらせられたもので、今日では、そんな錬成的な事を指導したりやかましくいふ人がゐるかどうか最近の様子はしらない。

方々の學校でも新聞講座はあつた、日大など正科にはいつてゐた、日大は確か二年間いつて私は御免蒙つたかと思ふ。某專門學校には毎週いつたが成績が少しも擧がらず寧ろ見榮にやつてゐるやうにさえ見うけられたので直ぐ引下つた。何も忙しい時間を割いてゆく必要はないと思つたからである。

一高にもいつた、その頃の幹事さんが某大學教授になつて今でも遊びにくるが、こんなのは氣持のいゝものである。

近頃は新聞以外に放送といふ事がやかましくなつた、過日早大の演劇博物館で發會されたやうだが日本の放送講座では早大が一番最初だといへる、外にもぽつ〳〵出來るやうだがまだ私の耳に入つて來ない。

要するに新聞の研究も根本からやり直す時機であり新聞が世間から無くなるとは思はれないが尠くも後代を繼ぐ新聞人は根本的に考へて出發し錬成してゆかない限り舊體の繼續であつては當然消滅の運命にあるといつていゝ。

8、奥村五百子女史

今夕は、結構なお集りですが幹事さんから私に奥村女史の事を話せといふ御註文で實は少々閉口してゐるのです。奥村五百子といふ女性は愛國婦人會といふ日本で最初の最大な團體をつくり上げた、而も努力と國家を思ふ熱とでやり上げたのですが其うしろには小笠原長生子等がゐられた、卽ち舊藩主であり肥前唐津で小笠原明山侯といふ立派な藩公の後嗣、この方が藩士である奥村女史を扶けられた、又奥村女史の宗門の法主である大谷光演（句佛）さんも一方ならぬ盡力をされた、この外近衞首相のお父さんとか、堀内中將（信水）とか、澤山の人があられるが小笠原子爵と大谷句佛師は御健在ですから此方々のお話

の方が生きてゐるかもしれない、第一私は朝鮮で一度奥村女史に會つたといふ位ですから生きた話は持つてゐない。思ふに幹事さんは私が「主婦の友」に書いた奥村女史の小説が昭和四五年頃帝劇で劇として脚光を浴び死んだ尾上梅幸や守田勘彌が好演技をしたので其のつながりから私に何か話せといふ段取になつたかしれません。一寸お斷はりしておきますが此臺本の私の書いた「奥村五百子」といふ本は相當に賣れました、當時ガムシヤラな女性の傳記などが賣れる筈はなかつたのですがドウいふものか出ました、一つは愛國婦人會で毎年全國の女學校に二三冊づゝ寄贈され優等生に贈呈された、當然私に印税がはいつてくるのですが私は之れはいけない、私に著作權があるので印税の問題が起り會の方で小冊子を出されても映畫を作られても、皆著作權にひゞいてくる、そこで版權を會の方へ寄附して了はふと決心しましたところ、婦人會の方でも快く請入れて下さつた早速内務省へ版權移讓の手つゞきを取りました、私には記念として私の胸像をいたゞきましたが兎に角今日では會のもので私のものではない、併し話なら差支へなからうと存じてホンの斷片的

な事を思ひ出しつゝ御清聽を煩はします。

奥村五百子といふ人は一面極めてはげしい氣性の人でした。官吏でも長上でも一旦國家の爲めになると思へば斷乎として議論もし要求もしたものです。女性の誰でも眞似は出來ない、「奥村は男性の生れ損ひだ」と世間でいつた位ですが初志を徹す一念は見上げたものでした。唐津の藩中ですが兄さんは奥村圓心といつてなか〳〵やり手であつた。お父さんも勤王といふ事に心を傾け寺は——私も一度お參りをしましたが——志士の仲次ぎ所みたいでした。帝劇の芝居の時、第一幕に此の寺を舞臺に見せ、有名な大蘇鐵を背景にしました。梅幸の扮する女史が忍びの姿で男裝し二本の刀を挿して笠と簑とに身をかくして寺をぬけ出ます。暗轉すると長州で高杉晋作が守備をしてゐる、そこへ女史が現はれて晋作と會見し一封の密書を出すのですが實はお父さんが高杉へ通じたい事があるが使者がない、五百子を男裝させて使にやつたといふ話があつたので私が脚色したのです。とにかく女史は男裝して、物騒な世界を悠々と歩き任務を果した、これが十八歳前後だつたかと存じま

す。明治十年には西南の役が起つた、この時も兄の圓心と意見がくひちがつた、兄の圓心といふ人も東本願寺の僧として九州や朝鮮など遠くで活動した豪潔僧でしたが兄は西郷方へつくのは法の爲めだ、法を守るために西郷方へつくといふ、五百子は西郷は實は勤王家だ、周圍の勢ひで抵抗するのだが味方するのはイヤだといふ、こゝの場面は梅幸と勘彌の二人限りで臺辭は長いし、迎も持てまいと思ひましたが案外二人の論爭も見物に分つたらしい。兄は西郷方が乘り込んできても此寺を動かないと頑張るのを唐津の檀家の人々が荷車へ縛りつけて避難する——五百子は兄が聞入れなければ西郷方に殺されるより自分で刺ちがへて死んだ方がいゝと雨の中を寺へやつてくる、すると兄は荷車へ結はへられて去つた後で五百子はホツと安心し佛様へ合掌して感謝する、といふのが幕切れでした。これも西南の役に兄と志が合はず兄を殺す決心をした、一方青年と虹の松原で西郷方へつくかつかないか爭ふたといふ話を脚色したものです。

さうかうするうちに水戸の藩士鯉淵某といふ人と結婚した、芝居や映畫では鯉淵彦五郎

となつてゐますが彦五郎といふのは鯉淵某です、小説にも芝居にもならぬから私が友人の名を借用したものです。それが誠しやかに傳へられて當時茨城縣下の新聞で彦五郎の詮議が始まつたり、勝手に彦五郎と使ふので私は苦笑したわけでした。

斯うお話すると五百子の一面しか出ませんが實は女らしい一面もありました。五百子は女の道についてもよく教へ込まれてゐました。

又今とはちがひますが、お裁縫などの外三味線とか舞踊とかいふ方面にも通じてゐました。小笠原子爵が海軍士官候補生として佐世保から唐津へ歸られたことがあります。舊藩主の若様がお歸りといふので藩士は舊御屋敷に集つて歡迎しました。すると藩士のゑらい人は易々とお目にかゝれるが五百子程度では會へない。すると俄かに三味線を嚙す音がしてひよつとこの面を被つた一人が藩士の間にはいつてきた、一同は驚いて道を開けると伴の人物は若様の前へゆき、面をとり三味線を下へおいて恭しく「私は奥村五百子と申します、どうぞお見知りおきを」と一禮した。これには小笠原子爵も驚いたが頓智にも感心し

た「これが奥村との交際の初まりです」と子爵は語られたことがある。

また鯉淵が祿をはなれて困つてゐる頃五百子はお茶の行商をしたが、なか〳〵商賣も上手だつたといふ事です。とにかく鯉淵といふ人との事は古い事ですし、知つた人は殆んどないのですが婦人としての貞節は盡したやうですが、獨身となるに及んで五百子の天性といふか、激しい氣性はあらはれていつた。

どこかの公館で掲げてゐる國旗が、風雪にやつれて破れてゐた、それをみた五百子は「破れた國旗を掲げて役人がつとまりますか」と引下して了ひ用意した新しい國旗を掲げたといふ話もあります。

北清事變の時、皇軍の慰問に支那へ渡つた、本願寺の力も借りたのでせう。その時天津の總領事館に鄭はま子といふ日本官吏の夫人が實によく活動された、籠城をする、籠城の同胞中にお產がある、彈丸が飛んでくる、その戰亂の渦中にあつてよく働らかれた、その鄭夫人の籠つてゐた一室をみて五百子女史は感激した、日本婦人は此の意氣がなくてはい

かん、何とかして日本女性の熱の團結を圖りたいと發起したのです。また戰地にゆくと敵の屍骸や死んだ豚が浮いてゐる。その汚ない流れの水で、日本の兵士が飯を焚いてゐる、これを見ても五百子女史はむら〳〵と日本婦人は團結せよといふ希望を立てた。

支那の各地の視察から始めて愛國婦人會設立の活動に入りました。婦人に向つて「國家のため半襟一掛を節約せよ」と叫んだのです、この半襟一掛の代が澤山貯ると兵隊さんは安心して戰爭が出來る、日本の婦人は兵隊さんに後顧の心配をさせてはならぬ、と叫んだのです。近衞公爵を說き大隈侯とか陸海軍の軍人とかを熱心に說いて歩いた、面會しない人の門前には握り飯をもつていつて終日待つてゐたといふのも此頃です。芝居で九段牛ケ淵公園の場をやつて通行人に向つて「半襟一掛を節約なさい」と叫ぶ時狂人ひ婆ア扱ひされた場面、あの堀立小屋みたいな中に籠つて申込用紙を配つてゐたのは現在の愛國婦人會本部の建物のある邊りで當時何かの門衞小屋か何かあつたらしいのです。この事が方々で評判になつた、畏くも閑院宮妃殿下に拜謁を賜はつたり、又東伏見宮妃殿下が同樣拜謁をお許

しになり、御激勵の御作の和歌を色紙にお認めになつて御下賜されるなど、五百子の事業は漸く雲上の方へも聞えるまでに尨大になつてきました。日本全國へも遊説して歩いた、銅像にあるあの姿で、地味な袴を穿き草鞋がけで片手に珠數をもち各地の東本願寺の末寺を根城にして活動しました、この半襟一掛といふ標語が相當行はれたものです、今とちがつて婦人は洋裝はしないし、半襟を盛んに買つた時代でせうからビーンとひゞいたのですね、どこへいつても汽車は三等、自分の金と會の金はハツキリ區別してゐました。停車場へつくと有志が迎へに來てゐる、すると五百子は「皆樣、お出迎へをいたゞき有難うございました」と一同に一緒に禮をいふのが例になつて一人々々形式的な辭義をするムダをしませんでした、「私は何十、何百人に御辭儀をするのだから疲れて了ふ、それより一緒にさせてもらひます」といふのが五百子の主張でした。

新潟だつたか、北國の旅でお寺の本堂で例の半襟一掛をやつて閉會すると聽衆はみな散つて了ふ、その最後に悄然とした長屋の女房らしい人があつた、おづ〳〵五百子に向つて

「私みたいな卑しいものでも加入させていたゞけませうか」と尋ねた、五百子は「ヱ、日本の婦人なら尊いとか卑しいとかの區別なく一人でも多くはいつていたゞきたいのです」と答へる、件の女房は一錢や五錢の小さい金をあつめて一圓として入會を申込むと申込書は五百子が代筆してやりました。これらは女性ですね、非常に五百子も感動して翌日早く町の片隅の長屋に其の女房をたづねていつたのです、女房は驚いて迎へると五百子は眞綿の入つた胴着を出して「これは尊い方から私がいたゞいたものです、あなたの眞ごゝろは神も佛も感ぜらるゝにちがひない、寒いから御體を大切になさい」と進呈した。女房が遠慮すると「いや私に下さつた尊いお方もきつとお喜び下さることゝ思ひます、風邪を引かないでお國のために働きなさいよ」と驛へ向ひました。斯ういふ一面もあつたのです、此事は確か脚色して私が放送協會にはいらない前に劇として放送したかと思ひます。此時は五百子を喜多村祿郎がやりまして女房を河合武雄がやりました、劇ですから女房の夫といふのをからませて、女房が入會したことを生意氣だと怒る、そこへ五百子がはいつてきて夫を

說く、夫も感動するといふ色づけになつたかと思ひます。

奥村女史は一方朝鮮の光州に日本村を起さうと計畫し、大工、左官、井戸掘人夫まで連れていつて移住者を募集し日本らしい村を建設しようとしましたが住民の反感を買ひ外國宣教師の煽動などもあつて事業は中途で駄目になりましたが、今日の朝鮮は五百子が夢みた如く一村より全土日本らしく活動する事に至つたでありませんか。

愛國婦人會も五十萬、百萬、二百萬と會員は殖えてゆく、日露の役でも實際的の活動をして伊東祐享大將とか八代大佐（後の大將）の同情もあつて大きくなり銃後の固めのみならず授産場とか隣保的な仕事をするとか活動方面もひろくなつてきました。

五百子は會長を岩倉公夫人だかに讓つて自分は引退し病を養ふことになつた。九段偕行社で引退の式を擧げた、その時は朝野の顯官有志がウンと集つて女史の引退を惜しんだ、女史は「お別れに一さし舞ひませう」と、近衞公から貰つた緋のうちかけを着て「船辨慶」の一節をうたひ乍らしづ〳〵と舞ふたのでした。こゝは芝居の場面にとり入れました、此

のうちかけは令息の勢一氏の處に今日も傳はり帝劇の時は陳列して一般の人に見てもらひました。

以上は奥村女史傳中の斷片的なものに過ぎません、皆さまは此挿話の中から何かお汲取り下さつたものがありませうか、それは定めし話下手の私の話ですから切々の印象しかのこりますまい、併し之れだけはお考へ願へますまいか。女性は弱いものである、いや實は強いものである、女の一念と申しますか、いゝ方向にさへ向けば一人の弱いと思はれる女性でも國家的の大きな仕事、いや御奉公が出來る、といふ事です。況んや女性が一人でなく二人、三人、五人、百人と寄ると何十倍もの大きな仕事が出來る。婦人だからとか女性だからといつて一概に引込んで了ふのは考へ樣では美德でも何でもない、一旦國家に有事の際は男子に劣らぬ働きも女性の團結に依つて可能となる——いはゞいゝ意味の奥村五百子精神とも申すべき「半襟一掛を節約せよ」の一語は大きな意味と力とをもつてゐるといふ事をくり返したいのであります。（昭和十五年四月、丸の内會館、もみぢ會席上談話）

9、歸還軍人を迎へて

只今、歸還された××君を迎へて、友人を代表し一言御挨拶いたします。

過去三ケ年間の御出征は誠に御苦勞樣でした、おかげで我皇國も安らかであつたばかりか、米、英に對する宣戰、世界の戰史に比類なき大戰果、南方の攻略、北方の固め、著々として御稜威の光輝、國運の進展、みな出征將士の盡忠無比の致すところと重ねて感謝いたします。思へば××君の出征當時は今日の情勢とちがつた樣相を呈してゐました。大陸に轉戰される最中に、米、英に對する天詔渙發となつたのですが定めし大陸の敵のみならず、風雨寒暑にも御辛勞のあつた事と察します。忙しい陣中からのお便りは我々友人が回

覽して銃後の固めに結束を固くするやう話し合つたのであります。此機會に改めてお禮を申上げます。

××君が銃創一つ受けず歸還されたといふ事は全く神助に依るものと確信します、又××君にも申上げますが、神助も無論ありますが、御兩親が毎朝毎夕交代で××神社に參拜されてゐる御姿を、我々は度々拜見しました、御兩親の祈念も亦お助けがあつた事と存じます。

御兩親樣へ××君を前にして申上げるのはドウかと存じますが、御心中深くお察し申上げます。定めしお喜びでありませう、併し××君の申した如く戰ひはこんな事で終結したのではありません、或は××君は又お召しに應じて出征されるかもしれません、私共も無論覺悟して居ります、最後の一兵となるまで戰ひ戰ひ拔く爲め二度も三度も出征しなければなりますまい。××君の御兩親が御出征後隱居所を引拂つて大いに若返られ、××君の歸るまで家業を守り通すといふ意氣でお客に對され仕入れとか量目を見られてゐところと

か、毎日のやうに拜見して友人の間でも流石は××君の御兩親だと話し合つたことです。

匆卒の際で意は盡しませんが御挨拶に代へます、將來、國運の益々隆昌とならん事と戰歿將士の英靈に篤く感謝の誠をさゝげます。こゝにお集りの皆さん、××君の發聲で先づ宮城を拜し天皇陛下の萬歳を三唱したいと存じます。御唱和を願ひます。

10、友人の一周忌に

本日は○○君の一周忌に當つて、我々同窓の者をお招きいたゞき誠に有難うございました。御父様の仰せらるゝ如く御馳走はなくても一同は眞ごゝろと一ぱいの水をいたゞけば結構です。たゞ○○君といふ一人息子を陛下に捧げられた、そのかなしみに屈せず御父様や御母様が家業に昔より一層御精勵なさつてゐることは地下の○○君も滿足だらうと推察します。○○君は出征に臨み、儲けないでいゝから仕事はやつて下さい、と望まれたさうですが儲けるといふ利己の利益など度外視されお互ひ銃後の爲め面倒な配給をされてゐる、其の御親切や眞劍な態度には隣組は勿論我々友人の間でも評判でした。

今日、一周忌に當つて何も申上げる事はありません、たゞ〇〇君の冥福と御兩親の御健康とを祈念する以外にないのでありますが友人の故を以て我儘を許していたゞけるなら〇〇君が發起した俳句の集り××吟社は依然として繼續し、若し他日機會があるなら〇〇君の俳人としての業蹟を一冊の本として出版したいと寄々相談してゐる、この一事を本日公表する次第であります。「戰時中になーンだ、俳句なぞ」といふ人もあるかもしれませんが俳句は昔の隱居や床屋さんの弄みものであつた發句とちがひまして、日本固有の文學、日本獨自の詩として大きな意義をもつて居り、今日の俳句は知識や思ひつきやケレンでは誰も認めもしないし、そんな句も作られてゐません。純眞な熱情を搔き立てる詩精神の昂揚といふ事は前線の兵士も認められ陣中で退屈しのぎでなく眞面目に俳句會が開かれてゐます。〇〇君の俳句に對する熱情は我々の××吟社を起したのみならず陣中でも××會といふ有志の俳句會をつくり通信には必らず其の會の消息や俳句を書いてくれました。

「ものゝあはれ」といふ事を申します。昔から、武士は物のあはれを知ると申してゐま

す。「ものゝあはれ」を知る事が俳句を生かす精神であるとしたら戰線の兵士にも一脈通ずる氣持がある筈です。〇〇君は「ものゝあはれ」を知る最も勇敢な兵士だつたと申せませう。私共の吟社に宛てゝ寄越された消息の中に

あかぎれの手に恩賜の煙草いたゞき候

といふ一節がある。これは手紙の文句の一節であらうか、又俳句であらうかと問題になりましたが、結局どちらでもいゝではないか、あかぎれの手といふ季題をもち、戰陣中の活動を現はした五文字があり、其手に恩賜の煙草をいたゞいたといふ一片の報告のやうだが、短い文句の中に皇恩の無邊大を尊ぶ感激もあり、彼の謙虛な態度も心構へもよく發散して通信かしれないが單なる通信とは思へない。〇〇君の最後の句として保存しようではないかといふ事に結論しまして、遺稿をまとめる場合には加へる事になりました。

一周忌のくる事の早さに驚かれます、と共にいろ〳〵な感懷がありますが本夕は〇〇君の遺稿を公刊する計畫の成つた事を報告するに止めます。

昭和十七年九月二十日初版印刷
昭和十七年十月一日初版發行
（五、〇〇〇部）

話術覺書
（停）定價 金八十錢

著者 小野賢一郎
東京市日本橋區江戸橋二ノ八
寶雲舍代表者
發行者 小池又一郎
東京市京橋區築地一ノ一四
印刷者 川橋源三郎
東京市京橋區築地一ノ一四
印刷所 仁川堂川橋印刷所
東京市神田區淡路町二ノ九
配給元 日本出版配給株式會社
東京市日本橋區江戸橋二ノ八（松慶ビル）
發行所 株式會社 寶雲舍
振替東京二六七三二番
電話日本橋（24）一九二六番
二四五六番
（文協會員番號一三〇五〇二）
（出文協承認ア二四〇〇八九）

山田秀藏著（日本出版文化協會推薦）

ビルマ讀本

今や久しきに亘る英國の制壓を脱して本然の東亜共榮圏にかへる時、ビルマ人は何を我が日本に期待するか。本書の著者はビルマ在住三十八年、ビルマ人の社會生活の表裏に通ずる第一人者として、その周洽徹底せる觀察は蓋し類書に見ざる所である。

B六判二五〇頁
口繪挿圖豐麗
定價二圓（〒一五）

野村貞吉著

新嘉坡と馬來半島

本書は在留三十年、マレーに足跡あまねき著者が大南洋の核心たる新嘉坡、馬來地方の實態に就き詳述したもので、その沿革を始め資源、文化、行政、地勢、住民、華僑、對外貿易、在留邦人の事業、軍備、軍港等に亘り一讀直ちに了解し得る南方群書中の白眉である。

B六判三〇〇頁
口繪挿圖豐麗
定價二圓（〒一五）

齋藤正雄著

東印度の文化

東印度群島が南方に於ける注目の焦點となつてゐる時、その内側に潜む固有の文化を知ることは南に伸びる運命を擔ふわが國として必要なことである。著者がジャワ、バタビアの東印度日報社長としての二十年の研究と見聞を收めた本書は單なる警見記や感想記でない點に意義がある。

B六判クロース裝
上製四六〇頁
現地寫眞四〇點
定價三圓（〒一五）

井上昇三著

動く濠洲

白濠主義を呼號し、東洋民族の入國を拒否し續けて來た濠洲は今や動搖の坩堝の中にある。本書は知る人拗きこの國の最近の實狀を現地生活の體驗を通して語つたもので、著者の熱意ある探求と觀察は白濠大陸の現實に鮮明なる眞實を展開して興味津々たる好著である。

B六判三〇〇頁
口繪豐麗
定價二圓（〒一五）

東京市日本橋區江戸橋二番
振替東京二七六二三
寶雲舍

伊與田國止著

南方民族の宗教

南方共榮圏ほど宗教事情の復雜性と多樣性を有する地域は他に全くない。しかし民族の魂といはれる宗教について正しい認識を持つことは今後の施策工作の根柢となるものである以上、先づ南方の宗教を知らなければならぬ。本書はその要請に應へるものである。

B6判・三七〇頁
口繪寫眞地圖入
定價二圓五十錢（〒一五）

仲原善德著

ボルネオとセレベス

今日まで恰好な紹介書のなかつたボルネオとセレベスの全貌は、現地踏査の體驗を持つ著者によつてはじめて茲に鮮明にされた。舊蘭印政府の利己的政策によつて世界の眼から蔽はれてゐた寶庫ボルネオ・セレベスの實態を知ることは目下の急務であらう。

B6判・四〇〇頁
口繪寫眞地圖入
定價二圓八十錢（〒一五）

齋藤正雄著

南海群島の神話と傳說

ジャワ島方面に於いて、現にインドネシヤ人が子供達に聽かせてゐる神話と傳說をあつめたものである。これらの物語は民族の文學的素質や道德や國民的氣宇を示すとともに或るものは民族の創業、印度佛教と回々教の宗教爭鬪史をも記錄してゐる。

B6判・三四〇頁
定價二圓（〒一五）

野村貞吉著

馬來夜話

馬來在留三十餘年の著者が語る馬來の邦人發展史として興味津々たる中に先進者の苦鬪した姿を示してゐる。邦人先進者はいかに働きいかに經營したか。同じ著者による前著「馬來半島と新嘉坡」と併讀されゝば馬來諸州の實情はいよいよ明瞭にされるであらう。

B6判・三五〇頁
別刷口繪挿入
定價二圓（〒一五）

東京市替東京日本橋區江戸橋二番
振替東京二七六二三
寶雲舍

小野賢一郎著

神像

社殿の奥深く神社としての神秘さを保つことを旨とした神像には、素撲簡潔な表現の中に我民族の貴重な一面が含まれてゐる。本書はこの線に沿つて豐富な圖版と共に解説しつゝ彫刻美の強調を試みたもの。なほ埴輪及び土器についても詳説す。

A5判・箱入美本
原色版寫眞版挿入
定價二圓五十錢(〒一五)

小野賢一郎著

戰爭と梅干

そのとらへるところ縱横無盡、そのかたるところ流通無碍。旅を語り、味覺を語り、或ひは句を語り陶器を語る。「戰爭と梅干」以下六十餘篇、興味は深々として盡きぬ新らしき泉である。まさに隨筆中の隨筆とは斯くの如きものをいふか。

B6判・箱入美本
著者自畫像入
定價二圓(〒一五)

山口諭助著

美の日本的完成

八紘一宇の遠大なる理想に生きる國民には、矢張りそれに相應しい美の理念がなければならぬ。我が國に於いて最高美として自覺的に尊重される「寂び」こそ正にかゝる美である。本書はこの最高美たる寂びの本質を探究し明確鮮明に述べた。

B6判・箱入美本
挿入寫眞豐富
定價二圓(〒一五)

中村亮平著

日本美術考

本書は日本の誇る傳統美術を、自然性、平明性、裝飾性、靈性、象徴性、融合性、獨創性、傳世等八項目に分けて明確平明に述べ、なほ附錄として正倉院の御物、正倉院の投壺、佛像に現はされた手、日本の假面伎樂面等、傳統藝術研究の項目を附した。

B6判・三〇〇頁
別刷口繪挿入
定價二圓(〒一五)

東京市日本橋區江戸橋二番
振替東京二六二三七
寶雲舍

製本控

917 函	374 號	年　月　日
統制令		1 冊
備考		

917
374

917
374

寶雲舍

終